

東洋學藝雜誌第二十號

明治十六年五月廿五日發兌

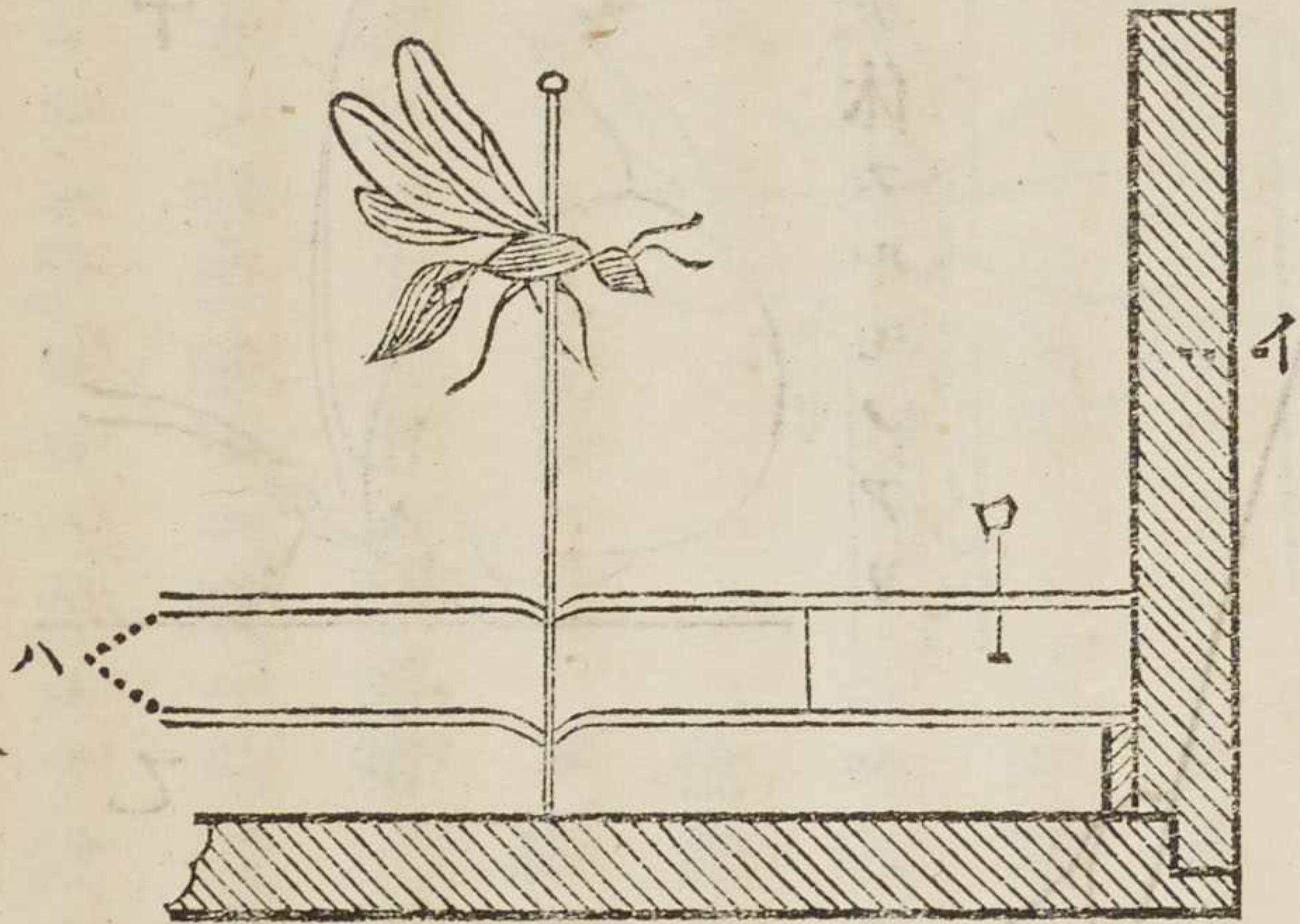
○六足蟲類獲集並ニ貯藏法

(前號ノ續キ)

石川千代松

貯蟲箱ニ種々アリ通常用フルモノハ高サ三尺五寸位幅一尺五寸深サ二尺ノ箱ノ内ニガラス蓋ノ付タル引出チ十二箇ホド入レタルモノナリ箱ノ外面ハ柏ノ木ニテ製シ引出ハ楠木ニテ作ルベシ引出ノ底ハ止針ヲサスニ便ナル様ニコルクノ板ヲ張り其ノ上ニ白キ紙チ一枚張り付クベシ然レモコルクノ板ハ非常ニ高價ナレハ引出ノ四角ニ二分許ノ細キ棒片ヲ張り付ク其ノ上ニ厚キ紙ニテ上下ヲ張タル

第七圖



ワクチ一枚ハメ込ミタルモノチ以テ宜シトス第七圖ハ此ノ如キ引出ヲ切斷シタルノ圖ニシテ(イ)ハ引出ノ板(ロ)ハワクノ木ナリ(ハ)ハワクノ上下ニ張りタル紙ナリ此ノ引出チ用フレハ其底ニコルク

ノ板チ用ヒサルモ蟲チサシテ充分ニ堅固ナリ然レモ貯蟲箱チ運送スル時ハ極メテ注意セサルヘカラス引出ノ木ハ楠木ヲ用フレハ多少害蟲等チ防ケ其ノ内ニ蟲チ貯ル時ハ其一方ノ角ニ少細ナルガラスノ管チ置キ其中ニ少々ノ海綿或ハ綿チ入レ強キ石炭酸チ一二滴ツ、兩三日間ニ注キ込ムヘシ

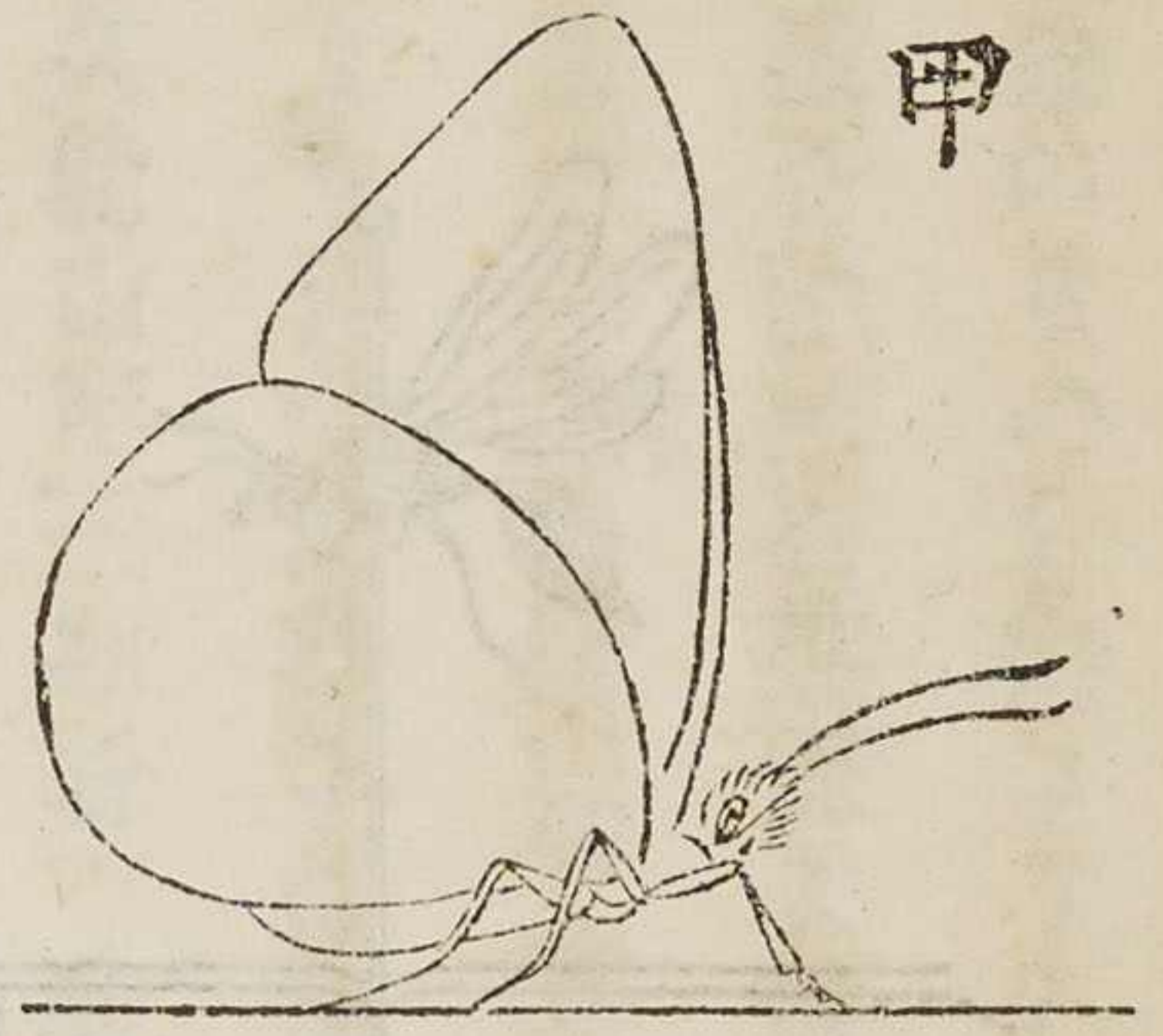
第二鱗翼蟲

鱗翼蟲トハ蝶蛾ノ類チ云フ其身體ハ稍々圓形ニシテ各環能ク密着シ頭ハ少ニコ口ハ細ク長クシテ(イ)ノ如シ過半ハ大ナル翼チ有ス此ノ蟲類ハ皆蠶蠹<sup>イモシケムシ</sup>、蝓<sup>イモシケムシ</sup>ノ生長シタルモノナリ

鱗翼蟲チ大別シテ二トナス一チ蝶トナシ一チ蛾トナス蝶ハ日中飛行スルモノニシテ其アンテナ(感觸機)ノサキ太ク其ノ休スル時ハ兩翼ヲ上ニ合セ疊ム(第八圖甲)蛾ハ夜中飛行スルモノニシテ其ノアンテナ或ハ鳥羽ノ如ク或ハ



第 八 圖 張 シ テ 休 ス ル モ ノ ア リ

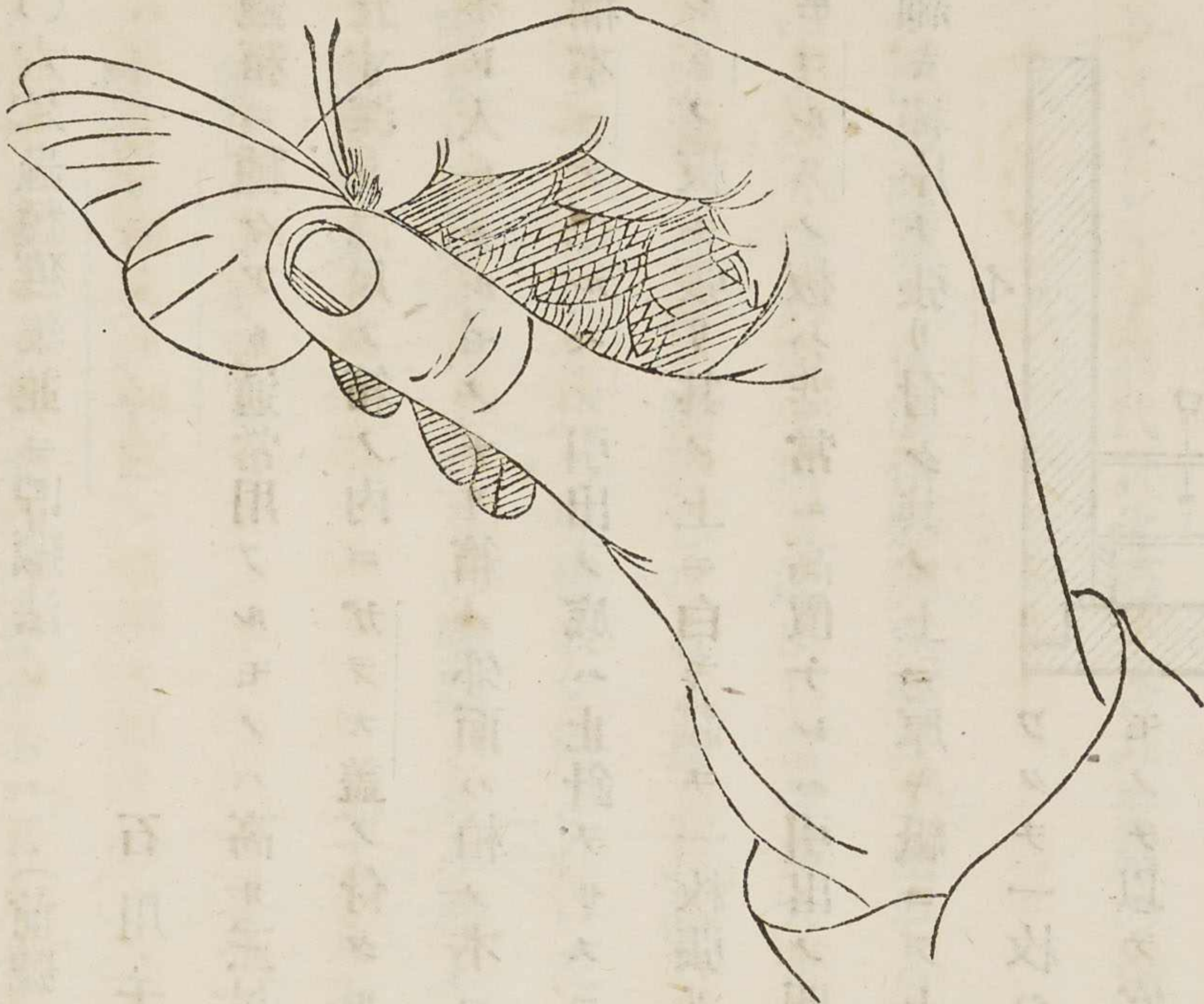


乙



細毛ノ如シ其ノ休スル時前ノ双翼ヲ腹部ノ上ニ置キ後ノ双翼ヲ覆ヒ匿ス(第八圖乙)或ハ又両翼ヲ擴

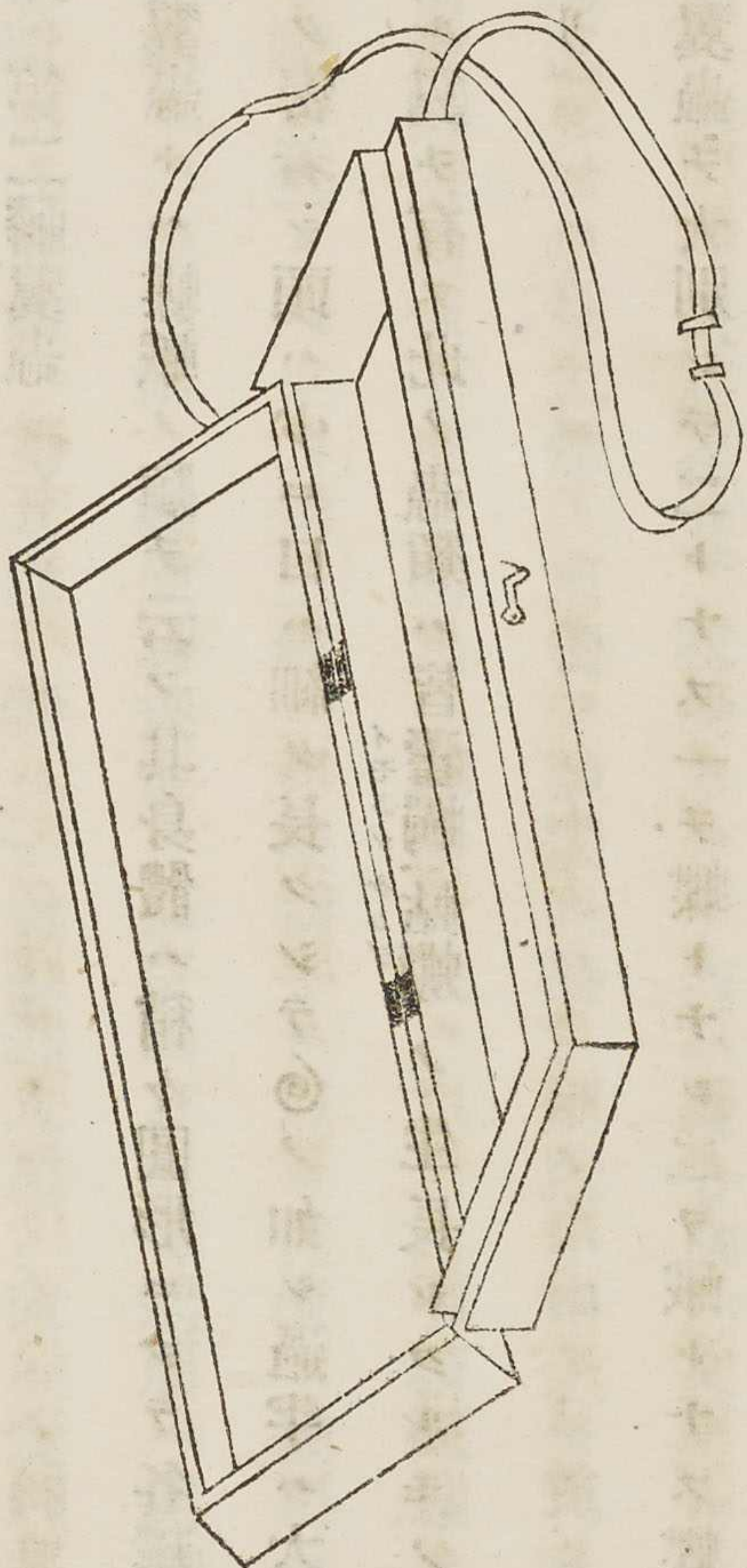
第 九 圖



箱ノ内へ横ニサスベシ(第九圖)

蝶ノ大ナルモノハ杓子網ニテスルヒ網ノ外ヨリ拇指ト食指トニテ蟲ノ胸部ヲオサヘテ之ヲ殺シ直ニ取リ出シ止針ヲ以テ荷蟲

第 十 圖



荷蟲箱トハ捕獲ニ出ル時常ニ肩ニ掛ケ集メタル蟲ヲ其内ニ入レ我カ宅ニ持テ來ルニ便ナル様ニ製シタル箱ヲ云フ此ノ箱ハ長サ一尺幅六寸深一寸位ニナシ梧桐ノ如キ輕キ木ニテ作タル箱ヲ二箇兩方ヨリ蝶鉸ヲ以テ合セ其ノ開閉ヲ便ニシ又箱ノ内側面三方ニ薄キ板ヲ付ケ其ノ閉タル時空氣ノ出入ヲ止ム(委キコトハ第十圖ヲ見ルヘシ)此ノ箱ヲ携フルニ便ナル様ニ一側面ニ金ノ環<sup>カチ</sup>ヲ付ケ之ヲ通シテ皮或ハ紐ヲ付ケ之レニテ右ノ肩ヨリ左ノ脇ノ下ニ擔フヘシ

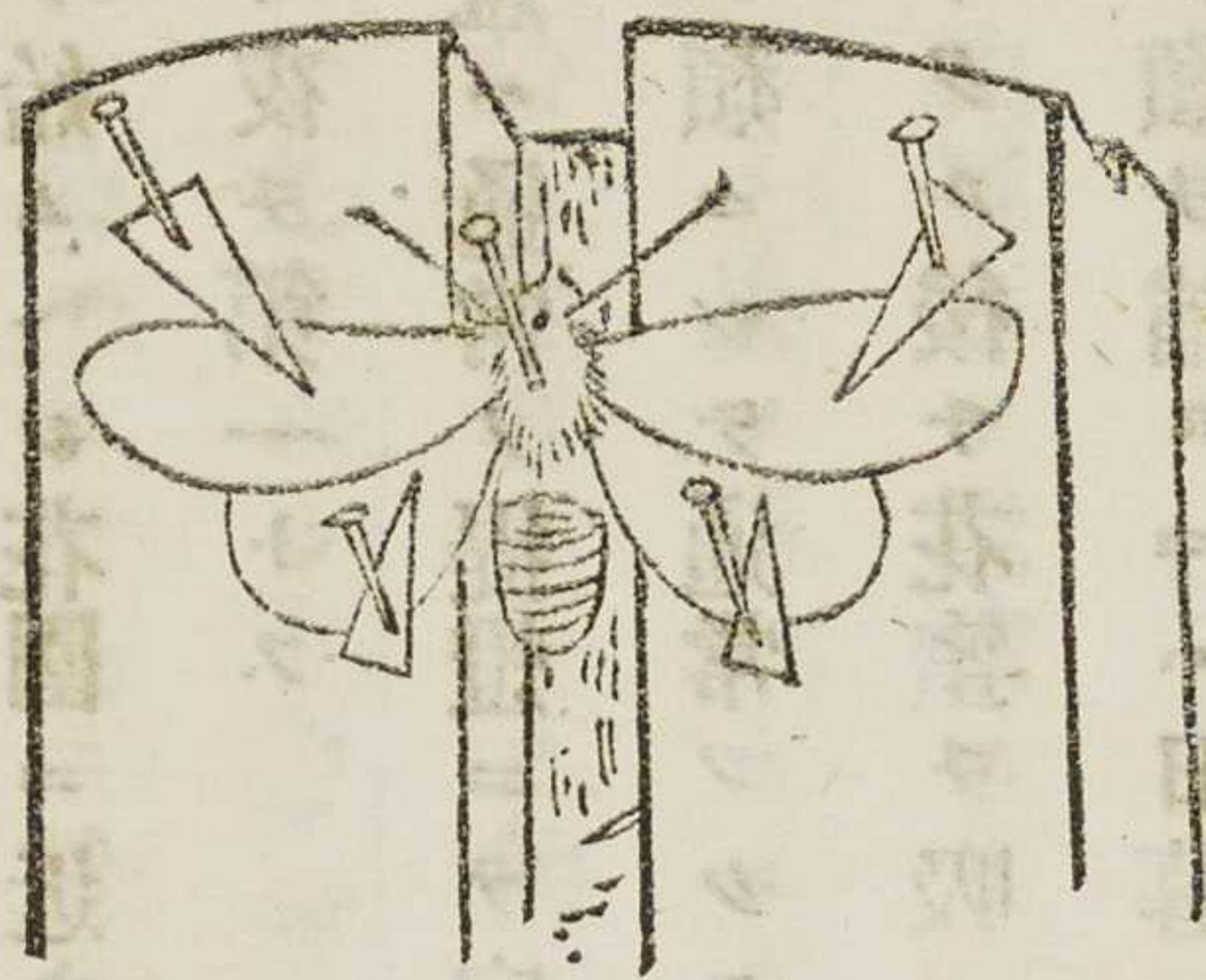
蝶類ニシテ高キ處ノミチ飛遊スルモノアリ之ヲ獲ルニハ其邊へ少石ヲ抛ルヘシ其時々石ト共ニ下リ來ルヲアリ又雌蝶ノ死シタルモノヲ其ノ邊ニ出シ置キテ雄蝶ヲ捕ル



アリ

前ニ記スル法ニテ殺シタルモノハ一兩時間ニシテ蘇生スレハ自宅へ歸タル時速ニ毒藥ヲ以テ再ヒ之ヲ殺スヘシ此ノ毒藥ハ稀酸ヲ水ニ溶解シタルモノナリ此レヲペンノ尖ニ付ケ蟲ノ胸部ニ注射スル時ハ一兩分時ニシテ死ス此ノ毒藥ハ大毒ナレハ能ク注意シテ用フヘシ決シテ小兒杯ニ與フ可ラス

第十圖



斯クノ如クニシテ殺シタル後直ニ乾蟲板ニ於テ羽翼ヲヒロゲ其充分ニ乾ク迄板上ニ置クヘシ其ノ羽翼ヲ整頓スルニハ先ツ稀酸ヲ以テ殺シタル蟲ヲ蟲針ニテ胸部ノ脊ヨリ少々後ノ方ニ斜ニ刺シ乾蟲板ノ溝ニ刺シ込ミ其双侧ノ面ニ於テ羽翼ノ位置ヲ正シ細少ナル厚キ三角形ノ紙ニテオサヘ置キ全ク乾キタル後板上ヨリ取出シ貯蟲箱ノ内ニ貯ヘ置ヘシ(第十一圖)細少ナル蝶類並ヒニ蛾ハ右様ニ指ニテ殺ス時ハ其ノ胸部ヲ害スルノ患アレハ之レヲ殺スニハ毒ノ入りタル瓶ヲ要

ス此ノ瓶ハ通常ノ水呑コップノ内ニ青化ボタースチ紙ニ包ミテ入レ其上ニ少々綿ヲ敷キ厚キ西洋紙ヲ圓ク切り數十ノ小孔ヲ穿テコップノ内ニ入レ綿ノ上ニ置テ丁度キツチリト挾マル様ニ致シコップノ蓋ヲ爲シタルモノナリ故ニ毒藥ノ氣蒸發シテコップノ内ニアルヲ以テ何レノ蟲ニテモ之ニ入ルレハ直チニ死ス此ノ毒藥モ亦大毒ナリ注意シテ用フヘシ

此ノ毒藥ニテ蟲ヲ殺スニハ蟲ヲ網ノ内ニテ毒瓶ノ内ニ入ルヘシ其ノ死シタル時ハ速カニ出シテ荷蟲箱ノ内ニ横ニサシ置クヘシ毒瓶中ニ餘リ久シク置ク時ハ反テ蟲ノ羽翼ヲ害スルコトアリ  
此ノ毒ニテ殺シタルモノモ再ヒ稀酸ニテ殺スヘシ  
蛾蟲ハ夜行スルモノナレハ此ヲ捕フルハ夜ヲ以テ好時ト爲ス然レモ日中ニテモ深林ノ中或ハ日陰ノ場處杯ニ於テ許多ノ種類ヲ得ルコトアリ又タ古木ノ穴或ハ古キ堂殿等ノ内ニ多ク住ミ居ルモノアリ其邊能ク注意シテ穿鑿スヘシ  
夜中之レヲ捕ルニハ酒ニテ砂糖ヲ溶シ深林中ノ木皮ノ上ニ塗り付ケ網、燈、箱毒瓶ヲ携ヘテ砂糖ヲ塗りタル木皮ヲ



尋ヌヘシ蛾ノ若シ木皮ニ止マルモノアレハ毒瓶ヲ以テ直  
 ナニ此レヲフセ左手ニテ瓶ノ蓋ヲナスヘシ此ノ方法ニテ  
 蛾ヲ捕フルニハ薄暮ヨリ林中ニ行キ都合宜シキ場處ヲ撰  
 ビテ始ムヘシ花園ニ近キ處並ニ月夜ハ宜シカラス蒸熱ノ  
 強キ夜ヲ第一トス

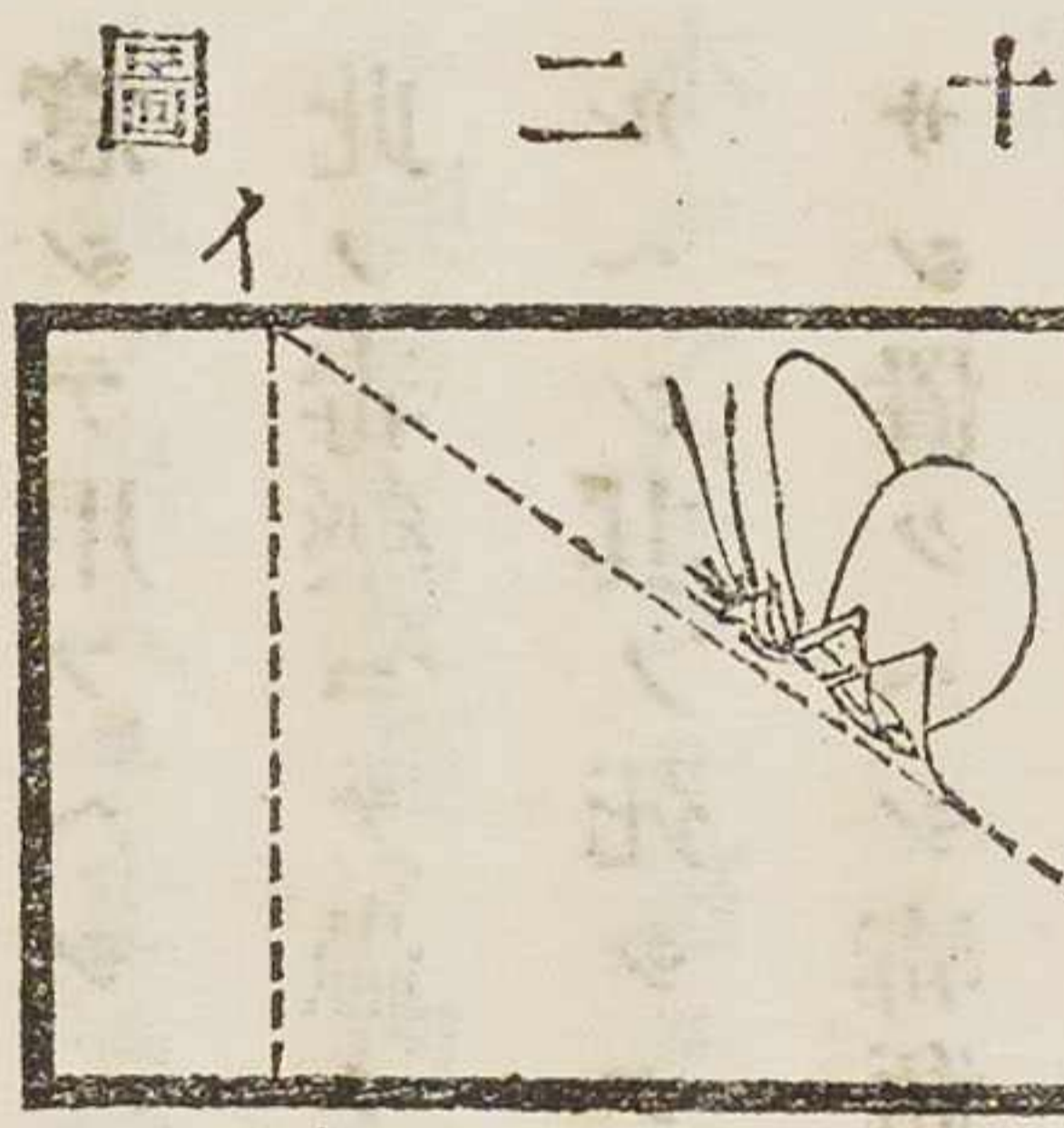
燈ハ通常ノ提燈ニテ宜シ

蛾ノ類ニシテ通常フクラスメト稱スルモノハ薄暮日ノ  
 入りタル後チ花蜜ヲ吸ハントテ花上チ飛廻スルモノナリ  
 此ノ類ヲ捕ルニハ日暮ニ花ノ多キ處ニ行キ網ヲ以テ其ノ  
 來ルチ待ツヘシ芙蓉木槿等ノ花ニ多ク來遊スルモノナリ  
 又タ白キ紙ニテ▽ノ如キモノヲ作り其ノ内ニ酒ニテ溶解  
 シタル砂糖ヲ少シ入レ棒ノ尖ニ付ケ森林ノ近傍ニ數十本  
 並ヘ置クヘシ蟲之ヲ見テ花ト思ヒ來ルナリ  
 又タ日中草木ノ内ニ匿ル、モノニシテ最微ナル蛾アリ名  
 ケテミクロ、レビドプテラト云フ此ノ類ノ蛾ヲ捕ルニ  
 ハ小形ノ曲物ヲ許多携ヘ灌木ノ多キ所ニ行キ右手ニ大ナ  
 ル網ヲ携ヘ左手ニ棒ヲ持テ木葉ヲ打チ逃ケ出ツル蛾ヲス  
 クヒ取ルヘシ網中ニ得タル蛾チ一疋ツ、曲物ノ内ニ入レ

家ニ歸リタル後其曲物チ一々机上ニ並ヘ一方ヨリクロ、  
 フオルムチ一二滴ツ、其ノ上ニ垂シ十四五分ノ後板上ニ  
 於テ羽翼ヲ正スヘシ

蛾ハ夜中往々燈明ノ下ニ來ルモノナレハ其ノ邊宜ク注意  
 シテ穿鑿スヘシ又タ住家森林ニ近キ處ニテハ一室内チ白  
 色ニ塗りランプヲ以テ其ノ内チ照シ戸ヲ開キ網ヲ以テ其

第十圖



ノ入口ニ立チ飛入ルモノヲ捕集ルヘ  
 シ鱗翼蟲類ヲ遠國ヘ送ルニハ稍ヤ厚  
 キ紙チ第十二圖ノ如ク長キ四角形ニ  
 斷チ圖中(イロ)ノ線ヨリ二ツニ折リ  
 其ノ内ニ蟲ノ羽翼ヲ疊ミタルマ、入  
 レ上ニ蟲ノ名、性、場所並ニ月日ヲ記  
 シ丈夫ナル箱ノ底ニ綿チ敷キ其上ニ數十載セ蓋ヲ爲シテ  
 送ルヘシ

○ 紙寫攝影術ノ部 磯野德二郎

今ヨリシテ鏡狀ナルダガレオ形ノ畫ヲ見レハ誠ニ見苦シ  
 キ限リナレモ千八百三十九年ノ昔ニ於テハ更ニ左ル事ハ  
 アラサリキ去レハ畫工ノ手ヲ藉ラス唯ハ太陽ノ光線ノミ



ニテ繪畫ヲ描出シ得ルノ奇ナルノミナラス光線ノ作用ニ依テ物体自ラ其眞影ヲ板上ニ留ルノ幻妙ナルヲ大ニ當時ノ人々ヲ吃驚セシメタリ此發明一度世ニ出テシヨリ或ハ過大ノ希望ヲ屬スルモノアリ或ハ杞憂ヲ抱クモノアリ憂フルモノ曰ク繪畫ハ忽チ廢擲セラレ畫工ハ餓死スヘシト喜フモノ曰ク吾人ハ自ラ欲スル所ノ繪畫ヲ自ラ描出スルヲ自在ナルヘシト疑フモノ曰ク光線ノ力ノミニテ眞影ヲ寫スナト、ハ到底不可爲ノコトニシテ彼ノ發明ハ全ク詐僞ニ出タルナラント然レモダゲール氏カ其秘密ヲ告ケタルハハムボルト、ビヨットアラゴノ一二學士アリテ以上ノ如キ抱疑者ヲ説破セリ

ビヨット氏ノ紹介ニヨリ佛國政府ヨリ毎年六千フランクノ俸給ヲ附與スルノ約ヲナシダゲール氏千八百三十九年八月十九日パレー、マザリンノ專門學校ニ於テ氏ノ秘法ヲ世ニ公ニセリ是ニ於テ諸國ヨリ來ルノ傳習生氏ノ門下ニ群集シ二年ヲ經テ歐ノ全洲此術ナキノ都府ナキニ至レリ學士ハ勿論婦人女子ニ至ル迄攝影法ヲ實行シ米國ニテハ博士モールス氏(後ニモールス電信器ヲ發明セシ人)始

テ之ヲ行ヘリ當時ダゲール氏自描ノ畫ハ一枚ノ價百二十フランクニシテ他ハ一枚一磅乃至二磅ナリシトツダゲール氏カ其攝影法ヲ世ニ公ニセシ同年ニ英人フオツクスタルポットト云ヘルモノ光線ノ力ニ依テ紙上ニ繪畫ヲ描寫スルノ法ヲ發見セリタルポット氏ハ食鹽ノ溶液ニ紙ヲ浸シ之ヲ乾燥シタル後銀液中ニ投セリ斯ク調製セルノ紙ハウエツヂウード氏カ用ヰタルモノヨリ大ニ鋭敏ニシ之ヲ前號ニ記セシカ如クニ植物ノ葉等ヲ寫スニ供セリ然レモハウエツヂウード氏カ經歷セル困難即チ暗處ニ置カサレハ全体ノ黑變スルヲ防止スルカ爲メニ氏ハ描寫シタル後ニ之ヲ食鹽ノ熱液ニ投シ銀鹽ノ多分ヲ除去シタルハ明處ニ置クモ非常ノ變化ヲナサス彼ノ有名ナルサル、チョーン、ハルシエル氏ハ硫々酸ソーダ(俗ニ次亞硫酸ソーダト云フ)溶液ニ没入シテ一層良好ノ着止法(假リニ譯ス)ヲ得タリ蓋シ此鹽ハ光線ニ依テ變化セサルノ銀鹽ヲ溶解スルノ性ヲ有ス

現今ニ於テハ此法大ニ植物ノ葉染用ノ摸形地圖繪畫等ヲ寫スニ用ヰラル



今模寫セント欲スル畫ヲ取テ之ヲ銀鹽ニ浸セル紙上ニ置  
 ノニ其白部ニ落ルノ光線ハ之ヲ通過シテ下ナル紙ヲ黑變  
 セシメ其黒部ニ落ルモノハ更ニ變化ヲ起スヲナシ故ニ黒  
 地ニ白キ畫ヲ生セン即チ原畫ノ黒部ハ白クシテ其白部ハ  
 黒ク其形狀ハ同一ナルモ全ク其色ノ反對ナルモノヲ得ヘ  
 シ之ヲ陰畫ト云フ (Negative) 更ニ陰畫ヲ攝影紙上ニ置キ  
 光線ニ曝露セハ則チ茲ニ描寫セルモノハ其黑白原畫ト同  
 一ナルヘシ之ヲ陽畫ト云フ (Positive) 之ヲ再言スレハ先  
 ツ原畫ヨリシテ色ノ淡濃全ク反對セルノ陰畫ヲ得然ル後  
 此陰畫ヨリ黑白形狀全ク同一ナルノ陽畫ヲ得ヘシ  
 ダルボット氏ハ更ニ一步ヲ進メ攝影鏡ノ力ニ依テ固体即  
 チ人物山水等ヲモ紙上ニ描寫セント盡力セリ氏ハ沃化銀  
 ニテ調製セル紙ヲ用サダゲール氏ノ發明後二年ニ其目的  
 チ達スルヲ得タリ其法タルヤ先ツ紙ヲ硝酸銀液ニ浸シ  
 然ル後沃化ボダシ液ニ投シ乾燥後攝影鏡ノ光線ニ曝露セ  
 シニ眞畫直ニ現出セヌ之ヲ暗室内ニ放置スルカ或ハ沒食  
 酸銀ヲ以テ處スル後ニ始テ分明ナル陰畫ヲ得タリ此陰畫  
 チ次亞硫酸ソーダニテ着止シ之ヨリシテ原物ニ異ナラサ

ルノ陽畫ヲ描出セリ  
 ダゲール氏ノ法ニテハ一時ニ一枚ノ寫眞ヲ製シ得ルノミ  
 ナリト雖モタルボット氏ノ法ニ依レハ一枚ノ陰畫能ク無  
 數ノ陽畫ヲ製シ得ヘシ是レ紙寫攝影術ノ後來ニ進歩シタ  
 ル一大原因ナリ然レモタルボット法製ノ寫眞ハ始メハダ  
 ガレオ形ニ比スレハ其劣ルヲ幾等ナルチ知ルヘカラス即  
 チ紙ノ粗笨一々陽畫ニ現レ實ニ見苦ルシキモノナリキ  
 ニコフター氏、ニエップス氏ノ甥ナリケルニエップス、ヅー、  
 サン、ヴ<sup>井</sup>クトル氏陰畫ヲ製スルニ當リ玻璃ヲ以テ紙ニ代  
 用スルノ好工夫ヲ案出セリ即チ沃化ボダシヲ溶解セル蛋  
 白質(鶏卵ノ白部)ヲ以テ玻璃ヲ覆ヒ乾燥硝酸銀液ニ浸シ  
 テ甚タ敏感ノ板ヲ製シ攝影鏡中ニ置クニ始メハ變化ヲ見  
 サルモ沒食酸液ニ之ヲ沒入スレハ忽チ陰畫ヲ生セリ此陰  
 畫ヨリ描寫セル陽畫ハ稍美麗ニシテダガレオ形ト比較  
 スルニ足ル程ナリキ此發明ハ千八百四十七年ニシテ世人  
 ノ注目スル所ナリシモ惜哉其方法不潔ナリシカ故ダガレ  
 オ形ニ習熟セシ人ハ多ク之ヲ不潔ト思考シ試驗チナス  
 チ嫌ヘリ



一方ニ於テハ又一枚ノ陰畫ヲ以テ殆ト無數ノ畫ヲ製シ得ヘキ大利アルヲ以テ心アル人ハ之ヲ看過スルコト能ハス指頭ノ汚染スルニモ係ハラヌ新法ヲ研究スルニ熱心シ蛋白質ハ分解シ易キノ不便アルヲ以テ別ニ永續スヘキ物質ヲ代用センコトヲ探索セシカ千八百四十七年ニ火綿ノ發明アリ此火綿タルヤイーサル及ヒ酒精ノ混合物ニ溶解シ之ヲ板上ニ注ケハイーサル及ヒ酒精ハ蒸發シテ白皮殘留ス此溶液ヲコロデオント云フ數多ノ攝影術試驗家之ヲ蛋白質ニ代用セントナシタリシモ更ニ好結果ヲ得サリシカ英國ニ於テアーチエル氏終ニ其志ヲ成シニエプス氏ノ法ニ比スレハ單簡ニシテ好陰畫ヲ製シ得ヘキコロデオン陰畫法ヲ發見セリ其方法タルヤ沃化ボダシヲ溶解セルコロデオンヲ以テ玻板ヲ覆ヒ之ヲ硝酸銀液ニ没入シタル後攝影鏡中ニ置キ沒食酸或ハ火性沒食酸或ハ綠礬ノ溶液ヲ以テ畫ヲ現出セシムルニアリ此陰畫ハ頗ル美麗ニシテ大ニタルポット氏ノ法ニ優レリ後蛋白質ヲ覆フテ撮影用ノ紙ヲ改良シ其表面頗ル平滑ニナリタルヲ以テ陽畫モ亦隨テ其風采ヲ増シタリ

斯ノ如ク始メハダゲール形ト到底比較シ難カリシタルポット氏ノ新法モ改良ニ改良ヲ加ヘ終ニダガレオ氏ノ舊法ニ駕シ千八百五十三年後ハ紙寫ノ聲價益々高ク現今ニ至リテハ更ニ一ノ舊法(ダゲール形)ヲ行フモノナキニ至レリ以上記述セシ所ハ現今一般ニ用ヰラル、撮影法ノ略史ニシテ他ノ發明ト同ク一朝一夕ノ勞力ニテ成就セシニアラサルナリ或ハ終身其研究ニ從事シ或ハ一家ノ財產ヲ之ニ擲テ數十年ノ久キヲ經數多ノ人士ノ勉強ニ依テ始テ今日ノ如キ稍々完全ノ地位ニ達セシムルコトヲ得タリ今ヤ攝影術ニ供用シ得ヘキモノ獨リ銀鹽ノミニ止マラスクロミウムユラニウム等ノ鹽類亦日光ニ觸レテ變化スルノ性アルコトヲ知レリ然レハ則チ自然ノ色彩ヲ備フルノ眞畫ヲ描出シ得ルニ至ルヤ蓋シ遠キコアラサルヘシ吾人ハ刮目シテ攝影術ノ今一步ヲ進ムルヲ俟モノナリ

○ 野蠻人種ノ消滅

松下 丈吉

生者必滅會者定離トハ實ニ千古ノ金言ナル哉、凡ソ生トシ生ケルモノ其命數ノ長短コソアレ一度ハ必ス北邙ノ塵



ト消エサルヲ得ス誠ニ消長生滅ノ數ハ生物ノ免レ得サル所ナリト知ル可シ然ルニ此事獨リ一個人ノ上ニ就テ然ルノミニ非ラス社會若クハ人種ノ上ニ就テモ亦然リトス蓋シ社會若クハ人種ナルモノモ人類個々ノ分子ヲ以テ組成シタル一有機體ニ過キサレハ此數アルモ決テ怪ムニ足ラサル也其消滅ノ原因何レノ邊ニ在ル乎請フ之ヲ論セン」

人種消滅ノ原因ヲ論究スル前ニ先ツ其消滅ノ狀景ヲ記サシ我北海道ノ蝦夷人ノ如キ之ヲ史ニ徵スルニ今ヲ去ルコト大凡ソ二千年前マテハ廣シ日本ニ散在シテ東京近傍ノ地ハ悉ク其占有スル所ト爲リ人口モ隨テ僅少ナラサリシニ近年ニ及ンテハ此地ノ山間ニ纔ニ氣息ヲ繫クニ過キス今ヨリ數十年ヲ出スシテ全ク地上ニ其跡ヲ絶ツヤ明白ナリ

ハンボルド氏ハ南亞米利加ニ於テ獨リ鸚鵡ノ凄然トシ、絶滅シタル人種ノ言語ヲ話スル者ヲ聞ケリ其他諸國ヨリ掘採スル所ノ器具多クハ絶滅シタル人種ノ遺物ナリトス」

クスマニア島ハ初メテ歐州人ノ移住シタル時ニ其人口或ハ七千ト爲シ或ハ二萬ト爲セリ夫ヨリ漸々減少シテ一千八百三十二年ノ頃ハ僅ニ一百二十八ト爲レリ然ルニ此

年悉ク之ヲ率テフリンドルス島ニ移住セシメタリ此島ノ氣候ハ殊ニ健康ニ適シ且ツ政廳ヨリモ厚ク之ヲ取扱ヒタリト雖モ大ニ其健康ヲ害ヒテ一千八百三十四年ニハ其數愈々減少シテ男子四十七人女子四十八人小兒十六人即チ總計一百一十一人ノ少數ニ減セリ斯ク速ニ其數ヲ減少シ土人モ只管其地ノ適セサルヲ憂フルヲ以テ一千八百四十七年再ヒクスマニアノ南方オイスター、コープト云ヘル地ニ移シタリ此時ニ當テ其人員ハ男子十四人女子二十二

人小兒十人ナリキ然ルニ轉地モ其効ナクシテ疾病常ニ絶エス一千八百六十四年ニハ唯タ一人ノ男子ト三人ノ女子トヲ殘セリト云フ

布哇島人口ノ減少ハ世人ノ能ク知レル所ナリ、クーク氏ガ初メテ該島ヲ發見セシ時ニハ三十萬ノ人口ヲ有セリ一千八百二十三年ニハ十四萬二千五十ト爲リ爾後左ノ割合ヲ以テ漸々減少セリ

一千八百三十二年 十三萬零三百十三人

一千八百三十六年 十萬八千五百七十九人

一千八百五十三年 七萬一千零十九人



一千八百六十年

六萬七千零八十四人

一千八百六十六年

五萬八千七百六十五人

一千八百七十二年

五萬一千五百三十一人

近年ニ至テ其狀況ノ如何ハ余輩未ダ之ヲ確知スルコト能ハ  
スト雖モ往々日本ニ殖民ヲ依頼スルカ如キ形跡アルヲ見  
レハ人口ノ減少未ダ全ク止マサルモノナラン

ニウ、ジ、ラ、ン、ド、ノ、マ、オ、リ、ス、族、モ、其、人、口、漸、々、減、少、シ、テ

今日ニ至テハ滅亡ニ向ントス、土人モ能ク之ヲ了知シ其

將來ノ命運ハ恰モ其土地ノ鼠カ歐洲ノ鼠ニ征服サレタル

カ如ク早晚已レモ亦タ歐洲人ノ爲メニ蹂躪セラル、コト

覺悟セリ一千八百三十年後十四年ノ間ニ其人口ノ減少ハ

百分ノ十九、四二ニ上レリ一千八百五十八年ニハ其總數

五萬三千七百人ナリシニ一千八百七十二年ニハ三萬六千

三百五十九人ニ減少シタリ即チ百分ノ三十二、二一九ノ割

合ナリトス實ニ驚クヘキノ數ニアラスヤ

右三例ハ近ク東洋ノ人種ヲ擧ゲタルモノナレトモ南北亞

米利加ニモ亦タ其例許多ナルヘシ夫レ斯ノ如ク野蠻人種

ノ漸々滅亡ニ就クハ抑、何ノ原因ニ由ル乎之ヲ討求スルコト

最モ必要ナルヘキヲ以テ聊左ニ卑見ヲ吐露セント欲ス

從來歐洲人ノ野蠻ニ接スル狀ハ實ニ慘酷ヲ極メタリシカ

近來ニ至ツテ漸ク其風ヲ脱シタルカ如シ例ヘハブラジル

ニ於テ葡萄牙人ハ猩紅熱若クハ痘瘡患者ノ衣服ヲ土人ノ

獵場ニ敷キテ其病熱ヲ傳ヘントシタルコトアリ北米人ハ常

ニ土人ノ飲料ニ供スル井水ニストレキニイテチ撒シテ之

ヲ害セント試ミタルコト多シ壕洲ノ殖民人ハ飢饉ニ際シテ

土人ニ付與スルニ砒素ヲ混和セル食物ヲ以テシタスマニ

アノ英人ハ土人ヲ殺シテ其愛犬ノ食ト爲セシコトアリ其慘

酷誠ニ言フニ堪ヘス是等ハ固ヨリ人種ノ減少ニ幾分ノ影

響ヲ起スモノナレトモ決シテ其主ナル原因トハ云フヘカ

ラス

開化人ノ觸接ハ大ニ人種ノ消滅ニ關係ヲ有スルモノ、如

シ何トナレハ啻ニ強大ナル人種ト戰端ヲ開クノミナラス

新疾病モ亦タ之ト共ニ侵入シテ大ニ其身体ヲ襲撃シ加フ

ルニ開化ノ器物陸續輸入シテ舊來衣食住ノ有様ヲ一變ス

ルモノアリ開化人ニ在テハ衣食住ノ有様ヲ一變スルカ如

キ瑣々タル一家事ニ過キスト雖モ野蠻人ハ敢テ然ラス固



着靜定ハ取リモ直サス野蠻ノ骨髓ニシテ聊ニテモ之ヲ損  
 スレハ則チ其生命ヲ奪フナリ往昔フヒツロイ氏南亞米  
 利加ヨリフヒーザン人ヲ携ヘ來リ英國ニ於テ之ヲ教育  
 セシマアリ其名ヲゼンミー、バットント稱シ耶蘇教ニモ  
 入りタルモノナリ后チタルウサシカ世界ヲ周遊スルニ  
 際シテ共ニ其舊國ニ歸レリ然ルニバットントハ其舊里ニ歸  
 ルヤ否ヤ歐洲ニ於テ常ニ其身ヲ放タサリシ手袋及ヒ靴ヲ  
 モ全ク之ヲ放擲シテ純然タル最初ノフヒーチアン人ニ復  
 セリト云フ以テ野蠻人ノ容易ニ化シ難キヲ知ルヘシ然リ  
 ト雖モ開化人ト交際スル以上ハ變化ノ道ヲ知ラサレハ滅  
 亡ノ外ナキハ尤モ瞭然タリトス濠洲人ノ言ニ黑人ハ素性  
 尊キカ故ニ敢テ勞働スルモノニ非ラスト畢竟野蠻人ハ寧  
 ロ死スルモ開化ニ進ムコトヲ好マスト謂フヘシ  
 然リト雖モ人種消滅ノ大原因ハ出生ノ減少ナリトス、生  
 物學ノ原則ニ據ルキハ生活ノ有様ニ變異ヲ生スレハ必ス  
 生殖機ニ關係シ及ホスモノナリト云フ人類モ亦タ然リ上  
 ニ掲ケタル布哇、タスマニアニウシラント諸島ノ人口  
 漸々滅亡ニ就クモ多クハ此原因ニ由ルモノナリ去レハ一

朝開化ノ風ニ逢フテ俄然生活ノ有様ヲ變シ就中布哇人ノ  
 如キ比々競フテ洋風ニ擬スルカ故ニ一千八百三十五年ヨ  
 リ一千八百三十七年ノ交ニ其一地方ニ於テハ一千百三十  
 四人中儘ニ二十五人又タ一地方ニ於テハ六百三十七人中  
 僅ニ十人ノミ小兒ヲ有セリト云フ

斯ノ如ク生活ノ有様ニ變異ヲ生スレハ亦タ生殖機ニ影響  
 チ及ホシ子孫ノ増殖ニモ關係スルノ理由ハ未タ判然セス  
 ト雖モ人種消滅ノ一大原因タルハ敢テ疑ヲ容レサル所ナ  
 リ其他戰爭、飢饉、淫佚、殺兒、奪掠婚姻等モ與ツテ人口ノ  
 減少ニ勢力アルモノナラン歟

右ハ匆卒ノ間ニ草シタルモノナレハ盡サ、ル所多シ將ニ  
 他日チ俟テ之ヲ補ハントス

○スミツス氏搖鍾實驗ノ景況 田中正平

本年四月下旬東京大學理學部ニ於テ米人スミツス氏外  
 一人重力ノ測定ヲ爲シタリ抑モ兩氏來航以前當地ニ於  
 テ該測定ヲ爲シタルコトナキニアラザレモ概テ皆ナ特別  
 ノ試驗ニ係リ十分ニ其誤差ヲ脱スルコト能ハサリキ去レ  
 バ比較測定ヲ爲シテ歐米各所ニ於テ諸大家カ最密ノ實



驗ヲ施シ得タル者ヨリ間接ニ之ヲ查定スルヲ極精ノ法トス兩氏ハ此法ヲ遵奉シタルヲナレバ其成果ノ良否ハ暫ク措キ學術上緊要ノコトナリトテ世ノ注目スル所トナレリ然ルニ大佐ゴロウパーハー氏ハ兩氏ノ依托ヲ受ケ其機械及ヒ觀測法等ノ概畧ヲ記シ之ヲ五月五日刊行ノシヤバノメールニ登錄セリ余モ亦タ同文ヲ反譯セシメテ約シタレバ今マ其全文ヲ譯シ以テ貴誌ノ欄内ヲ汚サントス看客中尙ホ詳細ヲ要セバ請フ理學協會雜誌中余ノ報告ヲ參觀セラレシトナ

過般來東京大學理學部内ニ於テ米國海岸及大三角測量課係員エドウィン、スミス氏並ニ同國セントルイ府ワシントン大學教授ブリチエツト氏ノ施行セラレタルペンヂエラム搖錘ノ試驗ハ大ニ吾人ノ注目ヲ促ス者ナリキ殊ニ右試驗ニ用ヒラレタル機械ハ學術上大ニ奇ナル來歴ヲ有スル者アリ抑モ搖錘試驗ノ目的タル地球ノ外形ヲ確定スルニ在ルハ世ノ知ル所ナリ地球ハ眞球ニ非ス南北兩極ヲ通過スル直徑ハ赤道直徑ヨリ稍ヤ短少ナレバ赤道ヨリ兩極ニ向ヒ進ムニ從ヒ益々中心ニ近接スル故ニ重力ハ愈々増加セサル

チ得ズ而シテ一搖錘ハ重力ノ強弱ニ依リ其振動ニ速遲ヲ生スルヲ以テ其振動時ト重力トノ關係ヲ確知シタランニハ地球上ニ所ノ重力ヲ比較スル只タ一搖錘ヲ兩所ニテ振ラシメ其振動時ヲ得ルニテ可ナリ又緯度ノ差違アル數所ノ重力ヲ明知セバ以テ地球ノ曲面ヲ推算スルニ足ルベシ以上陳スル所ニ僅ニ其大略ヲ摘要セルニ過キス實際觀測スルニ當リテハ種々ノ困難ヲ生ス今マ機械構造ノ容易ナラザルハ暫ク措キ氣壓寒暖空氣ノ抵抗、搖錘ニ接近セル物體ノ引力、等ハ皆チ搖錘ノ運動ニ影響ヲ及ホス者ナレバ此等ノ難事ハ全ク除去スルカ或ハ每觀測チ同一ノ情況ニ約成セザルベカラザルガ故ニ古來搖錘ノ試驗上大ナル妨ゲヲ爲シ來リシニ千八百年紀ノ中頃以來諸國ノ物理學者ノ探究ニヨリ纔ニ其範圍ヲ脫スルコトヲ得タリ當時ニ在リテハ地球ノ内部物質配置ノ明瞭ナラザルニ原因スル誤差ノミハ未ダ全ク刪除スル能ハサルモ其餘ノ原因ハ惣テ矯正シ得ベシト明言スルモ可ナルノ地位ニ至リタリスミス及ヒブリチツト兩氏ノ持參セル搖錘ハ三箇凡テ英國ノ尉官ケーター氏ノ構造法ニ倣ヒ千九百年紀ノ始ニ



當リ製造セラレタル者ニシテ印度ヒマレヤ山嶽及ヒハル  
 トン礦内其他數十ヶ所ニ於テ歷用セラレ六十餘年ノ星霜  
 チ閱スルモ毫モ損所ナク保存ノ行届キタルノ歎賞スルニ  
 餘リアリ

附屬天象觀測用時辰ハ尙ホ古物ニシテ實ニ千七百六十九  
 年金星經過觀測ノ爲メ龍動府時計師シエルトン氏ノ作レ  
 ル者ナリ其外觀ハ頗ル醜キモ蓋シ時ヲ示スノ精密ナル他  
 ノ良時辰ニ讓ル所ナシトス兩氏ハトランシット子午儀、記時筒、クロ  
 ノメートル等ヲモ亦タ携ヘラレタリ

時辰附屬振子ノ一端ニ暗黒ニシテ圓形ナル一少札アリテ  
 其中央ノ兩邊ニ數箇白點整列ス蓋シ米國ニ來ル前、少佐  
 ハーシエル氏ノ手ニ在リシキ氏ノ考案ニ出ル者ナリトツ  
 テ觀測毎ニ燈火ヲ以テ之ヲ照シ白點ヲ視易カラシム  
 時辰正面チ距ル三四尺ニシテ巨大ナル石臺ヲ築キ之ニ木  
 製ニシテ頗ル堅牢ナルフレーム組臺ヲ据ヘ懸ルニ一大真空筒ヲ以  
 テ大面シテケーター搖錘此筒内ニ動搖ヒシメラル、トナ  
 レハ附屬排氣鐘ヲ以テ筒内ノ空氣ヲ汲出セバ其壓力ヲ隨  
 意ニ増減セシメ又タ試驗中其量ヲシテ外部氣壓ノ變移ニ

感應スルコトナカラシムベシ此筒ノ下部ニ一少窓アリ硝子  
 ノ板コテ之ヲ覆フカ故ニ筒外ヨリ望遠鏡ヲ以筒内ニ振動  
 スル搖錘ノ極端即チ錘尾ト時辰振子ニ附點セル白點ト同  
 時ニ觀察スルチ得、故ニ兩體ノ運行ヲ比較スルコト敢テ難  
 事ニアラス而シテ二者各々其振動時チ異ニスレハ白點ハ  
 常ニ錘ノ極端ニ對シ其位置ヲ變シ錘尾カ其振極ニ達シタ  
 ルノ際、白點ハ一時其後ニ匿レ暫クシテ又タ現出スルコ  
 アリ今マ其匿ル、ノ時ト現出スルノ時チ該時辰ニ據リテ  
 檢センコト兩時ノ平均ハ即チ搖錘ト時辰ノ振子ト同時ニ其  
 振極ニ達シ相振動スルノ位置。相附合セルノ時チ與ヘン  
 數箇ノ白點ニ觀測チ施シ其平數チ取レハ一附合時ノ近接  
 ナル結果チ得ベシ八分乃至十三分ノ後又同白點カ同所ニ  
 於テ匿レテ又タ現出スルノキ前ノ如キ觀測チ爲サハ再度  
 ノ附合時チ得ヘシ而シテ兩附合ノ間一搖錘ハ他ヨリ正ニ  
 二度ノ振動チ増シタルコト明カナレハ之ヨリ兩者振動時間  
 ノ差ヲ推測スルコト容易ナリ  
 時辰ノ時差ハ恒星觀測ヨリ算出スルチ得レハ右ノ觀測ヨ  
 リケーター搖錘一振動時チ確定スルチ得ベキナリ即チ温



度ノ差、氣壓ノ差、振幅等ヨリ起ル誤差ヲ矯正シタル後チ最モ細密ナル振動時ヲ得ルト云フベシ又タ之ヲ他所ニテ查定セシ成果ト比較セハ兩所重力ノ關係ヲ知ルニ至ラン

フミツス氏プリチエト氏ハ先年新ゼーランドニ至リ金星經過ノ觀測ヲ爲シ歸國ノ途次東京其他東洋ニテ未タ重力ノ定測アラザル數ヶ所ニ於テ試驗ヲ施シ歐米諸國重力確定ノ地ト連絡ヲ通センコトヲ兩氏ニ托セラレタルコト實ニ賀スベキノ至リナリ又タ是ニ此事ヲ略記スルヲ得タルモノニ兩氏ノ厚情ヨリ出ル者ナレハ吾人ハ聊カ氏等カ學術ノ爲メ盡サル、チ勞慰セント欲スルナリ

かたばみろ、たのたね、

ごとき、た、な、きた、

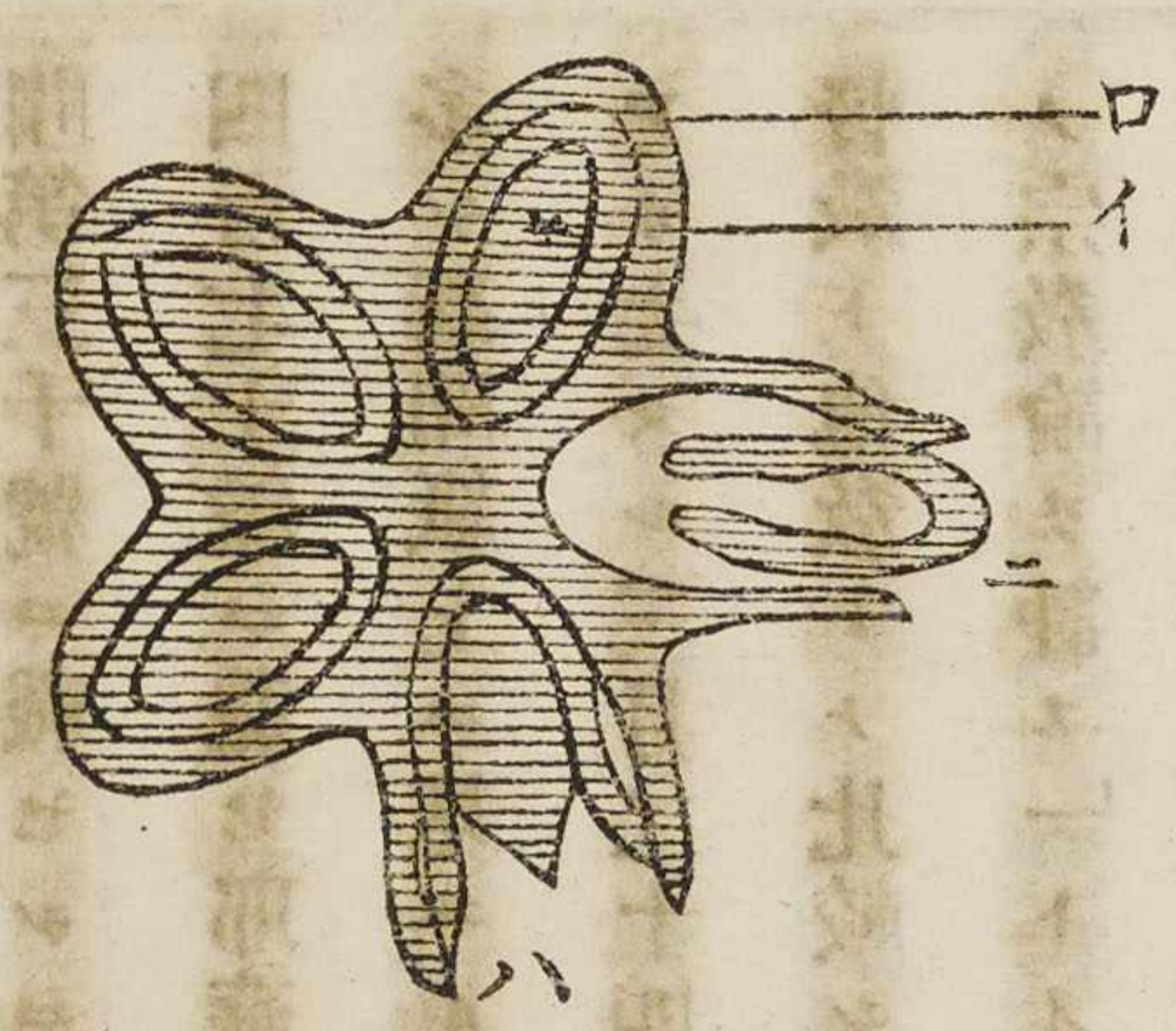
かたばみろ、たはこべつめくさあとのたね、た

けんびきよ、たまたみればろのひよ、たたんわぎ、だぎざれあしあるいわさめのかわのごとき、きりてあるあま、かくのごとき、ひよ、ためん、ろぞ、たあるわこれらのくさのいんしよ、くのた、めよ、ただつがごといかん、とあれをひよ、ため、

んがろぞ、たあればたねがもの、ひ、つ、つ、き、やすく、とりけもの、ま、ま、ま、みの、あ、ま、ま、つ、き、て、ご、かく、ま、い、こ、ば、る、ご、ご、あ、ま、ま、ま、なり、

かたをみそ、かのみのト、ゆ、く、いたるところこれ、

まさわれ、たね、わ、かのづと、さ、や、より、は、か、ま、と、び、ち、る、こ、と、わ、ひ、と、の、し、ば、い、み、る、こ、と、な、り、そ、の、と、び、ち、る、わ、た、ね、の、ぐ、る、り、よ、し、ろ、き、り、わ、ありて、み、の、ト、ゆ、く、い、る、こ、ろ、ま、わ、つ、ね、よ、ろ、り、か、ね、ら、ん、と、ま、ま、ま、ま、と、た、ん、よ、こ、の、か、わ、の、い、つ、



たね、た、さ、や、よ、り、は、ト、き、ご、す、ご、ゆ、ね、あ、り、こ、こ、ま、あ、ら、わ、い、る、づ、わ、か、た、ば、み、そ、れ、の、み、ね、よ、こ、ま、き、り、る、づ、な、り、い、わ、た、ね、わ、た、ね、の、か、ま、な、り、ハ、ま、た、糸、の、あ、わ、の、ろ、り、あ、え、り、ト、め、ま、ま、ま、と、こ、ろ、あ、り、



ニわかむがトゆうぶんろりかわりて たねかひ  
 じきだしたるところなり、 たねの とびぶす わ  
 いかいぶのやけれをこのときよりわのいさらさ  
 かみるわかとし、これかみやとくらゝむるよわ  
 いまぶトゆうぶんトゆうくさざるやとんどトゆうく  
 けりけたるみかとりろのうらよりわかひら  
 ぶりたるさねたぬごりのいとおはりよくさ  
 すありいよよくさせばわがそのてんよりさ  
 けてそりかえるあり この たねわそのとびち  
 るときろばよもけかかけをろのものよよく  
 ひつつくものありそれゆにすずめあどがうたバ  
 みを「おあふるることあればたねがとびぶすと  
 きろのけよからみつきてその たねよとれくわ  
 はこべるることあるあらん、

批評

○日々新聞ノ宗教論ヲ評シ併セテイビー氏ニ答フ

井上哲次郎

余曾テ耶蘇辨惑序ヲ草シテ學藝雜誌第十八號並ニ報知新  
 聞第三千號ニ載セシニ佛教ノ徒ハ之ヲ喜デ明教新誌第千  
 四百七十號ニ載セ耶蘇教ノ徒ニハ怒テ之ヲ駁撃スルモノ  
 多シ新聞紙上ニ見ユル所ニ據レバ英人イビー氏ト云フ者  
 アリ去ヌル三月二十四日並ニ三十日明治會堂ニ於テ「基  
 督教ト他教トヲ比較シ併セテ井上哲次郎氏並ニ日報記者  
 ノ宗教論ヲ評ス」トイフ題ニテ演說セリ又吉岡弘毅ト云  
 フ者アリイビー氏ト同日ニ井生村樓ニ於テ「讀耶蘇辨惑  
 序」ト云フ題ニテ演說セリ又謙堂漁叟ト云フ者アリ六合  
 雜誌第三十二號ニ「耶蘇辨惑序ヲ讀ム」ト題セル文ヲ草  
 セリ抑テ余ガ草セル文ハ尋常ノ序文ナリ一篇ノ宗教論ト  
 シテ作りシ者ニアラズ然ルニソレヲ喋々評論スルモノハ  
 爭論ヲ好ムノ徒ナルヘシ余固ヨリ此輩ト論鋒ヲ交フルチ  
 屑トセズ假令ヒ此輩ガ如何ホド我ヲ讒毀スルモ余ハ之ヲ  
 脛上ノ蚤虱ト同一視セントス且ツ余ハ實ニ此輩ニ答フル  
 ノ餘暇ヲ得ザルナリ然レモ又少シニテモ答辨ヲセザレバ  
 彼レノ爲メニ誘惑セラル、モノナキヲ保シ難シ故ニ強ヒ  
 テ百忙ヲ排シテ答辨ヲナスモノナリ



彼ノ吉岡氏ガ論旨ハ如何ナルコナリシヤ余之ヲ聞クヲ得  
 ザリキ謙堂漁叟ガ文ハ載セテ六合雜誌第三十二號ニアリ  
 未ダ其篇ヲ完了セサレヒ其語氣可笑ホド虚傲ナレバ謙堂  
 ナ傲堂ト改稱スル方然ルベシト思フナリ且ツ其言ノ如キ  
 ハ論法上ノ虚譌ニ陷イラザルモノ殆ンド稀ナレバ若シ他  
 日餘暇ヲ得バ之ヲモ撃破セントス若シ少シク閑暇ヲ得テ  
 此輩ノ論ヲ一々撃破スルナラバ實ニ小兒ヲ弄ブヨリ易シ  
 ト雖モ然レトモ之ヲ爲スハ余輩ニ於テ往々無益ノ徒勞ニ  
 属シ彼ニアリテハ此事ノミガ糊口ノ道ナレバ此點ヲ撃破  
 セラレテハ死ニモノ狂ヒナセザルヲ得ザルノ事情アルナ  
 リ  
 然レヒ此等ノ事ハ姑ク之ヲ置キテ本論ニ立歸ランニ彼イ  
 ビー氏ノ演說モ余ハ之ヲ聞クヲ得ザリキ然レヒ經濟雜誌  
 第百五十六號コイビー氏本月廿四日ノ演說ヲ評ス」ト題  
 セル文アリ其中ニ云ク「氏ガ井上哲次郎君及ビ日報記者  
 ノ說ヲ評ストノ一節ノ如キ其議論簡短ニシテ且ツ往々罵  
 詈ニ類スルガ如キヲアリ」トアルニヨリテ之ヲ見レバ  
 イビー氏ハ好ンデ人ヲ罵詈スト見ユ抑々是レ耶蘇ノ教ナ

ルニヤ（我邦ノ人西洋人ヲ以テ盡クシク學識アリトスベカ  
 ラズ蓋シ我邦ニ來ルノ輩ハ多クハ不學ノ徒ニシテ有名ノ  
 學者ハ殆ンド稀ナリ）猶ホ又日々新聞第三千三百八十九  
 號ノ雜報欄内ニ「一昨三十一日明治會堂にて英國博士イ  
 ビー氏の邦語學術演說ハ基督教と他宗教と比較之併て井  
 上哲次郎氏並ニ日報記者の宗教論を評すとの論題にて最  
 初の基督教其他の宗教の起原實歴を擧げ後ろみ掲げある  
 輿地圖を指示して説明し又聖書の眞意をも説き痛くスベ  
 ンサー氏の說を攻撃し次て儒道と佛教とを論及し日本眞  
 正の道德ハ佛教とありと其事實を擧げ終り  
 お井上氏の耶蘇辨惑の序と就て交々類例を擧げ排撃し且  
 つ曰く同氏の聊も聖書を讀まざる人と想像せり今之を駁  
 するの別な辭を費やそよ及ばず幸ニ日報記者の宗教論  
 の有るあり其論旨確實なれば此の宗教論を朗讀する時の  
 自から井上氏の說ハ敗滅とべしとて本社日々新聞欄内よ  
 掲げし宗教論の要所を抜摘朗讀して演說を終られぬ」  
 云云トアリ是レハイビー氏ガ自ラ日报社ニ行キ頻ニ記者  
 ノ論ヲ賛成シテ余ガ事ヲワルク云ヒシヲ以テ記者ハ實ニ



然ルヲカト思ヒ余ガ事ヲ斯ク惡シザマニ書キナシタルナ  
 リソハサテ置キ此文ニ據リテ考フルハハイビー氏ノ説ハ  
 日報記者ノ説ト同ジキニ似タリ又日々新聞第三千三百九  
 十九號ノ雜報欄内ニ載スル所ニ據レハイビー氏ハ日報記  
 者ノ宗教論ヲ別冊トシテ印行シ衆人ニ分與セリ因テ益々  
 日報記者ノ説ハイビー氏ノ説ト同ウシテ余ガ説ト反對ナ  
 ルベシト思ヒ日々新聞第三千三百四十八號ヨリ全第三千  
 三百五十二號ニ涉ル所ノ宗教論ヲ讀ミシニ其旨意唯ク宗  
 教ヲ維持スベシトイフニアリ其論至極御尤ナリト評セザ  
 ルヲ得ズ余モ亦倫理新説ノ中ニ宗教ノ興サマルベカラ  
 ザル所以ヲ詳説セルヲハ世人ノ熟知スル所ナリ即チ余ノ  
 説ハ日報記者ノ説ト暗合セル者ナリ然ルニハイビー氏ハ何  
 故ニ日報記者ノ説ヲ以テ余ガ説ト全ク相反セル者トセシ  
 カ其意最モ解シ難シ夫レ宗教ノ維持セザルベカラザルヲ  
 ハイビー氏ト雖モ佛教ノ徒ト雖モ皆其見解ヲ同ウスルナ  
 ルベシ但何ノ宗教ヲ以テ我邦ノ宗教トナスベキヤノ問題  
 ニ至リテ各自其見解ヲ異ニスルナリ彼ノ日報記者ノ如キ  
 何ノ宗教ヲ維持スベキト云フハ露ホドモイハズ唯ク宗

教ノ維持セザルベカラザルヲ云フノミ余モ宗教維持ス  
 ベカラズ破壊スベシトハ決シテ言ハズ又左様ニ言ヒシヲ  
 ハ決シテコレナキナリ即チ余ガ説ハ少シモ日報記者ノ説  
 ト相反セザルナリ然レモ特殊ノ宗教ヲ舉グルルハ余ハ或  
 ハ之ヲ取ラザルヲアリ日報記者ト雖モハイビー氏ト雖モ拜  
 蛇教ヤ拜猫教ヤ拜火教ナドヲ維持スベシ盛ニスベシ國教  
 トナスベシ杯トハ云ハザルベシ故ニ宗教一般ノ上ニ就テ  
 論ズルキト特殊ノ宗教ヲ論ズルキトハ全ク格別ナリ夫ノ  
 日報記者ノ論ズル所ハ宗教一般ノ上ノ事ナリ故ニ余ガ説  
 ト毫モ背馳セザルモノト信ズ而シテ若シ特殊ノ宗教ニ就  
 テ之ヲ言ヘハイビー氏ノ説必ズシモ日報記者ノ説ニ合ハ  
 ザルナルベシ若シ此點ヲ疑フ者アラバ日報記者ノ宗教論  
 ナ一讀セヨ必ズ氷釋スベシ  
 然レモハイビー氏ノ意ヲ察スルニハイビー氏ハ余ガ耶蘇辨惑  
 ノ序ニ耶蘇教(即チ特殊ノ宗教)ノ日本ニ興スベカラザル  
 ヲ論セシヲ以テ余ヲ以テ總テ宗教(即チ宗教一般)ヲ無  
 用視スルモノトセシナラン果シテ然ラバ氏ハ太シキ謬誤  
 ニ陷イリシ者ト云ハザルヲ得ズ氏若シ倫理新説ヲ一讀セ



ハ必ズ余ガ眞意ノ存スル所ヲ覺ルベシ余ハ決シテ宗教一  
 般ヲ取ラザルモノニアラズ特殊ノ宗教ヲ取ラザルモノナ  
 リ例ヘバ茲ニ人アリテ余ハ酒ヲ好ムト言ハンニ「ギン」若  
 クハ「ホウ<sup>#</sup>スキー」ノ如キモノヲ與ヘバ或ハ之ヲ好マザ  
 ルベシ然ルニ之ヲ酒ヲ好マザル人ト言フ耶是レ論法ニテ  
 イハユル一般ノ場合ヨリ特殊ノ場合ヲ推論スルノ虛偽ナ  
 リ日報記者モ耶蘇教ヲ日本ニ入レテ可ナルヤ否ヤト云フ  
 「ニハ未ダ少シモ論及セズ（但シ今ヨリ耶蘇ヲ信仰スル  
 ヤ否ヤソレハイザ知ラス）唯、廣ク宗教ノ維持セザルベ  
 カラザルヲ論ゼシマデノ「ナリ然ルニイビー氏ハ何故  
 ニ余ガ説ヲ以テ日報記者ト相反スルモノトスルヤ是レ  
 余ノ最モ解セザル所ナリ然ルニ六合雜誌ニモ余ガ倫理新  
 說中ニ宗教ノ倫理ニ關係アルヲ云ヒ耶蘇辨惑ノ序ニ耶  
 蘇教ノ信ズベカラザルヲ云ヒシチ矛盾セル様ニ論ゼリ  
 此輩ハ一向ニ物ノ區別ヲ知ラザランヤ耶蘇教ノ如キ特殊  
 ノ宗教ヲ新ニ外國ヨリ輸入スルヲハ余ガ最モ忌ム所ニテ  
 余ハ別ニ一種高等ノ宗教ヲ要スルモノナリ然レモ此等ノ  
 事ニ就テハ匆卒ニ論シ盡シ難キヲ以テ他日細論スルヲア

ルベシ但シ余ハイビー氏ノ言ニ於テ最モ解スベカラザル  
 「アルヲ以テ聊此ニ辨明スルモノナリ

○讀關原軍記

杉浦正臣 稿

世之讀關原軍記者。莫不贊嘆德川家康之籌畫得宜焉。予獨  
 以爲東軍之捷僥倖而已矣。固非有全勝之算也。期於敗而幸  
 得克也。何以知之。曰。以上田之圍知之矣。何者。此役也。家康  
 將步騎二萬自東海道進。秀忠將二萬自東山道進。將會于關  
 原也。夫東西與敗之決。在此一舉。則二道之兵。不可不刻日  
 而會也。雖三尺童子亦知之矣。秀忠素熟軍機者。當晝夜兼  
 行。無愆其期。而獨區々擁兵。圍上田之城。踣跽累日者何也。  
 且夫關原本也。上田末也。舍本向末。何顛倒之甚也。何失軍  
 機之甚也。或曰。憂真田氏之蹈後也。果然。蓋半隊以當之。半  
 隊以會軍耶。予反覆思之。得其說焉。家康之向西也。蓋其心  
 以爲我以寡敵衆。況有上杉氏窺背。恐不能成武揚之功也。於  
 是乎密戒秀忠。使之故頓兵于中道。俟敗聞至。疾歸三河。守  
 其四疆。以謀再舉也。故秀忠之攻上田。非利其城也。曠日以  
 俟關原之報也。而大捷之報至。實出其意外。於是解圍抵關  
 原。則家康責以後期。是所謂英雄欺人者。雖其宿將如本多正



純。不能察其機密。救解之。而不悟為其所欺也。嗚呼豈獨正純。雖後世亦不免為其所欺也。吾故曰。家康期於敗而幸得克也。雖然家康之深謀遠慮。縱令失利於此役。亦未必至一敗塗地也。其再舉以成業也必矣。然則謂之籌畫得宜。不亦宜乎。不亦宜乎。

雜錄

○北川岸次君傳

北川岸次、本姓小菅、號岸齊、越後魚沼郡船澤村人、父曰孫左衛門、出嗣同郡浦佐驛北川氏家、々世業彫工、岸次幼有技能、嘗彫鄉之白山神殿木像、又造多聞殿扁額、漸名於鄉、明治五季、春、出游東京、卜居于淺草、為開拓使學校工人、七年六月、陸軍省落士官學校、岸次與有力焉、八年三月為開成學校工人、先是、醫學教習用人躰摸形、而皆係洋製、邦人未有倣之者也、至是、命岸次製焉、乃據佛人之法、雜以意匠、拮据黽勉踰年而成、其法、先刻木型、漆之厚至數寸、而剝取則得漆型、而後以紙糊之、施以彩色、軀幹臟腑莫不具備、楮製人躰是也、十年、文部省命陳之于內國勸業博覽會、官賜龍紋賞

牌、以表其精工、後又寄贈之于米國博覽會、於是、姓名籍甚、方是時、醫學隆興、病院學校之用人躰摸形者、日多一日、官命岸次更製之、以助其不給焉、其後大學醫學部命岸次、更製精緻者、乃以技手、受解剖助教授今田東之指授、起工、實十二年一月也、於是、潛心覃思閱數年而成、其身躰皮膚之構造、肺腑脈絡之系統、精微周悉、殆奪天工、而莫不中理學之規矩焉、泰西醫士亦觀之贊嘆不措也、十五年三月罹病、八月三日遂歿、享年四十有七、葬于東京谷中天王寺、娶小島氏、生二男三女、嗣子千次、尚幼、門人相謀、經紀家事以報其恩云、岸次為人、真率自任、不肯媚世、有古良工之風、家雖業雕工、亦兼通描金石繪畫之技、而其執業、堅忍不撓、或至忘食、晚年、又學解剖學、頗得其要訣、而其技亦益進、其教子弟、誘掖懇到、各成其材、方今楮製人躰之係邦製者、莫一非北川師弟之所製焉、其裨補於醫道、洵非鮮少也、於戲盛哉、可以不朽乎後世矣、嘗余以務、屢接岸次、悉其為人、感其絕技、今也則亡矣、可不嘆哉、適有門人之需、乃叙所聞見、以為之傳、明治十六年春二月東京大學助教關谷清景

○ソル、シヨーン、ヲボツク氏ノ零傳

鬼窟主人



余嘗テベンシアミン、フランクリンノ傳ヲ讀ミ其學識ニ富ミ實務ニ長シ加フルニ道德高尚ニシテ一點ノ欠クルナキヲ見テ大ニ驚歎セリ依テ以爲ラシ所謂一世一人世間多ク得難キノ君子ナリト後チソル、ジョーン、ラボツク氏ノ傳ヲ閱スルニ及ンテ始メテ英國ニ亦チフランクリンアルヲ知レリ

氏ハ一千八百三十四年四月三十日英國龍動府ニ生ル、父ソルジョーン、ウヰルリアム、ラボツクハラボツク社銀行ノ頭取タリ、久シク英國學士會院ノ會計及ヒ副會長ト爲リ頗ル天文併ニ數學上ノ著書ニ富メリ就中無名ニテ出版セル「蓋然性ノ説」ノ如キ人或ハド、モルガンノ筆ニ歸シタルコアリ以テ其尋常ニ非ラサルヲ知ルヘシ、此父ニシテ此子アリ氏カ多能ナルモ亦チ故ナキニ非ラス

氏ハワージング氏ノ私塾ニ於テ初メテ教授ヲ受ケ后チエトソ校ニ入レリ歳甫メテ十四學校ヲ辭シテ銀行ノ役員ト爲ル固ヨリ其好ム所ニアラスト雖モ勉メテ完全ナル實務家トナランヲ欲セリ、父没スルニ及ンテ其職ヲ繼キテ頭取ト爲ル、爾后拮据經營スル所誠ニ勤カラス今日尙ホ

ラボツク社ノ長タリ

氏カ銀行者トシテ世益ヲ興シタルコト少カラス就中一千八百五十一年地方銀行ノ交換制度ヲ設立シタルヲ以テ其第一ニ置カサルヘカラス是レ全クウヰルリアムギレット氏ノ發案ニ依ルト雖モ若シ氏カ盡力ナカリセハ豈ニ容易ニ之ヲ設立スルコト得ヘケンヤ抑々交換所ノ便益ナルコトハ更ニ辨チ俟タスト雖モ一例ヲ舉ケテ之ヲ言ハ、地方交換所ノ設置ナキ以前ハ例ヘハ二百所ニ宛テタル二百ノ手形ヲ所持スル甲銀行ハ悉ク之ヲ郵便ニ附シテ二百所ニ遞送セサル可カラズ而シテ二百所ノ銀行ヨリハ各々其龍動締盟銀行ニ通知シテ甲銀行ノ龍動締盟者ニ仕拂ハシメ其迂遠實ニ云フニ堪ヘサリシモ今ヤ二百所ニ一百ノ郵便ヲ發スルヲ要セス唯ダ一東ト爲シテ之ヲ龍動締盟者ニ送致スレハ締盟者ハ之ヲ以テ交換所ニ行キ仕拂フヘキ銀行ノ龍動締盟者ニ差出セハ事足ルナリ其簡單想ヒ見ルベシ氏ハ龍動銀行會ノ名譽書記タリ、サレハ其集會ノ記録ヲ保存シ及ヒ交換所ノ内治ヲ司ルノミナラス若シ銀行者ノ間ニ政治ニ關スル問題アルキハ其代理トナリテ議院ニ出



ツルノ義務ヲモ負擔セリ、銀行ノ功勞此ノ如ク大ナルヲ以テ銀行者同盟ノ開設アルニ當テヤ皆氏ヲ推シテ總理ノ職ニ置ケリ蓋シ其社員ハ今日二千有餘ニ上レリト云フ以テ氏カ銀行者ノ間ニ名譽ヲ得タルノ一端ヲ窺フニ足ルヘシ、嘗テ萬國貨幣鑄造委員ト爲リ理財上ニ涉レル有益ノ論文ヲ草スルコトモ亦タ少シトセス、他人ニ在テハ右ニ揭ケタル職務ヲ盡スヲ以テ己ニ餘暇ナカルヘシヲボツク氏ニ於テハ決シテ然ラス特ニ一商人ノ資格ヲ守ルヲ以テ足レリトセス充分ニ餘暇ヲ蓄ヘテ以テ學問ヲ研究スルノ資ニ供セリ而シテ其研究スル所一トシテ名譽ヲ博セサルハナシ生物學ノ如キ幼少ヨリ深ク之ニ心ヲ留メタルカ故ニ父ウヰルリアム、ヲボツクハ彼ノ高名ナルタルウヰン氏其近傍ニ移住スルニ及ンテ喜ンテ之ニ師事セシメタリ此時ヨリ孜々倦マズ著ス所ノ生物書類ル多シ皆昆蟲ニ關係シ蟻、蜂ノ究察ニ最モ力ヲ極メタリ其研究ノ方法誠ニ精巧ニシテ發明スル所少カラスト云フ其說ハ主トシテタルウヰンヲ祖述シ現今英國ニ於テハツクスレー、スペンサー等ト肩ヲ比スル進化主義ノ一學士

ナリ又太古器物ノ考究ニ力ヲ盡シテ親シク彼ノ古器物學上ニ最モ利害ヲ有スルデンマアクノ介墟及ヒ佛國ソノム河畔ノ漂積層ヲ查察シ其他歐洲各地公私ノ博物館ヲ回覽シテ大ニ得ル所アリ遂ニ一書ヲ世ニ公ニセリ「有史前時期考」即チ是ナリ其要旨ハ古器物及ヒ近時野蠻ノ習俗ニ依リテ有史前ノ景狀ヲ説明スルコトアリ其論周到精確ニシテ迎モ多忙ナル銀行者ノ手ニ成ルモノトハ思ハレサルナリ斯クテ廣ク野蠻ニ關スル文書ヲ繙閱シ、爲メニ開化ノ起元ヲ考究スルノ機會ヲ得タリ一千八百六十八年ロイアルイノスチチユーシヨニ於テ始メテ此等ノ討究ヲ講シ后チ大ニ増補シテ一書ト爲シ「開化ノ起元及ヒ人類初代ノ景狀」ト題シテ之ヲ出版セリ即チ進化ノ主義ヲ應用シテ野蠻ノ技術、婚姻、宗教、道德、及ヒ法律ヲ討求シ人類ノ純然タル野蠻ノ有様ヨリ漸々今日ノ開化ニ進ミタル所以ノ理ヲ論究シタルモノナリ書中奪掠婚姻ノ源因ヲ論スルカ如キ尙ホスペンサー氏ノ攻撃ヲ免レスト雖モ要スルニ一大著述ト云ハサル可カラズ



一千八百七十二年龍動大學ノ副總理ニ任セラレ近年ニ至  
ツテ復タ大英博物館ノ保管ヲ囑托セラル學士會院林那斯  
會、地理學會、地質學會人種學會、考古會、昆蟲學會等内外  
數多ノ理學會人員ニシテ就中人種會昆蟲學會ニ於テハ數  
度會長ト爲リ客歲ハマタ大英理學獎勵會ニ於テ會長ノ役  
ヲ務メタリ學位ハオックスフォード大學ノ民法博士及ヒ  
ダブリン大學ノ法律博士ナリ

氏ハ斯ノ如ク商業、學問、ノ兩世界ニ逍遙スルヲ以テ未ダ  
足レリトセス一千八百六十五年ヨリ漸ク政治世界ニ歩キ  
進メ再三ノ失敗ヲ經テ終ニ下院議員ノ列ニ入ルヲ得タ  
リ乃チ此ニ提出セル議案甚ダ許多ナリト雖モ最モ世人ノ  
注意ヲ喚起シタルモノハ古碑保存案ナリトス、其要領ハ  
「古碑ノ持主ニシテ若シ之ヲ破壊セント欲スルハ必ス  
先ツ相當ノ價ニテ國民ニ購求ノ撰擇ヲ與ヘサルヘカラ  
ス」ト云フコアリ故ニ一委員會ヲ興シテ特ニ古碑ノ保存  
ヲ管理セシメンヲ主張セリ而シテ古物學ニ熱心スル輩  
ハ大ニ其論ヲ賛成シ英國中ノ古器物學會ハ殘ラス其認可  
ヲ請願シダレトモ終ニ多數ニ制セラレテ廢案トナリ又然

リト雖モラボツク氏ハ敢テ之ニ屈スルコナク自カラ數千  
金ヲ抛ツテ一二ノ古碑ヲ購求セラレタリ

一千八百五十六年ピートル、ホードン氏ノ女ヲ娶ツテ  
三男三女ヲ舉ク夫人モ亦タ天才ニ富ミ氏カ蜂、蟻、古器物  
等ヲ考索スルニ際シテハ其助力ノ功亦タ鮮少ナラスト云  
フ一千八百六十二年ヨリ六十二年ノ交ニ當テ夫人自カラ  
丁抹介墟論ヲ草シ休暇雜誌ニ投シタルコアリ然ルニ天道  
空クシテ一千八百七十九年夫ニ先ツテ黃泉ノ客トハナ  
ラレタリ

右ハ余輩カ知り得タルツルシヨーン、ラボツク氏ノ累傳  
ナリトス氏カ多能ナル商業ニ學問ニ政治ニ一トシテ人後  
ニ立ツコナシ而シテ本年僅カニ四十九未ダ老イタリト謂  
フヘカラス今後ノ舉動刮目シテ俟ツヘキナリ、夫レ氏カ  
多能ナル何ヲ以テ此ニ至レル乎人其故ヲ怪ムナルヘシ然  
リト雖モ決シテ深キ方便アルニ非ラス唯タ勉勵ノ二字ニ  
在ルノミ、左レハ氏ハ常ニ早起シテ食前ニ二三時間ノ勉  
強ヲ爲スト云フ嗚呼英國ニラボツクアリ米國ニフランソ  
リンアリ而シテ將來日本ノラボツクタルモノ果シテ是レ



誰ソヤ

○後樂園雜詩(園在東京小石川舊水戸藩邸内、實係義公所開)原十二

敬香 大江孝之

千秋遺蹟見精神。墨氣淋漓筆勢勻。雨惡風狂曾未損。留將古

色照今人。後樂園扁額朱文恭氏所書

溶々綠水遶青苔。鬱々春林護釣臺。若得移家此中住。人間未

必羨蓬萊。天女島中安天女廟

茂松密竹護林廊。圓月橋頭幽更幽。小立忽牽懷古感。欲將往

事問溪流。圓月橋朱文恭所命而造

推讓千年事已陳。春風細雨影相親。古堂寥落無人到。空看扁

名題得仁。得仁堂祭伯夷叔齊

老楓千樹跨溪間。寄石怪巖苔色斑。豈啻橋名呼渡月。依稀風

景小嵐山。小嵐山擬舊都嵐山

猷公一去跡茫茫。俯仰乾坤感更長。猶剩當年遺愛在。西湖堤

上舊甘棠。西湖堤上古松傳云大猷公會遊于此掛衣巾於樹枝

左臨湖水右臨庭。誰以佳名名此亭。劫後依然風致在。新臺猶

認舊模型。涵德亭舊亭曾罹祝融之災劫後更造今亭總存舊模型

香雲掩映水亭前。春向雨中觀更研。老樹不知浮世事。花開花落幾年々。亭前垂枝櫻

菊池三溪評云。一部有韵洛陽名園記縮本。

呈井上巽軒大兄

志氣欽君百鍊剛。不關世上幾炎涼。多年學海究英佛。餘力藝林修漢唐。著作別占閑富貴。風流常見好詞章。期功百世丈夫事。偉業須傳身後芳。

○かいしらそ(佐久間象山翁謫居の歌)

しかれぢのひかにいあれど、うつくしいやまよものよも、  
いるさればのあさをり、秋つらばもみぢよほへり、そ  
をめでのゆき山ゆき、あまつ日のくるもしらず、あそ  
ふあるひともしあり、しかれどもさそらふるみ、いる  
の野のいなもかさ、あきやまのみぢをみせ、たら  
ちねのいのうふこの、まゆごもりこもりてあぶくど  
ぞへよける

かへらう

きみがさめたらはしりせむをへをなみ

あたらよはひのいらくをしも



○寒邨夜歸といへる題にてよめる新

体の歌

小川健次郎郵送

草木も眠る丑三を、あれ一道とく只ひとり、遠寺ののねの  
かと凄く、小笹を渡る夜ゆらりの、我を襲へる九折、登る  
もくらき杉村を、洩來る月の片われの、何地往よけん、梟  
のこゑより、外も友もあらず、かゝる淋しき土地あれと、と  
めの都の闇サワガき、車の塵もかゝるねの、權貴の門あへつら  
ひて、名利に追われ牛馬よ、まけぬ重荷を負ひ擔ぎ、我ど  
我身も使ひるゝ、苦痛のいふて春の花、夏の螢や郭公、秋  
の鹿の音月雪と、四時をりくくの景物を、我もの顔も  
てあそぶ、身の昭代の棄材とぞ、自らゆるし友も亦、瓢一  
ツよ王公や貴人もいらぬ快樂の、多き此身を神は謝し、謳  
への返を谷の山彦

寄書

○黃石公ハ鬼物ニアラス又隱君子ニアラサルヲ論ス

井上圓了

張良ノ匿レテ下邳ニアルヤ、書ヲ圮上ノ老人ニ受クルノ

事、甚怪ムヘシ、人或ハ以テ鬼物トナシ、更ニ其何物タルヲ  
究メス、獨リ蘇氏之ヲ論シテ隱君子ノ出テ、張良ヲ試ル  
モノトス、或ハ云フ、氏ノ卓見以テ千歳ノ惑ヲ解クヘシト、  
余以爲ラク、世ノ之ヲ鬼物トナスカ如キ、勿論信ヲ置クコ  
足ラスト雖モ、之ヲ隱君子ト斷言スル又疑ナキ能ハス蓋  
シ蘇氏何ヲ以テ其隱君子ナルヲ知り、且ツ之ヲ證スルヤ、  
唯氏ハ世ニ鬼物ノアルナキヲ信シテ、此ノ如キ臆想ヲナ  
スニ過キササルナリ、今史記ニ據テ之ヲ攷フルニ、老人一編  
ノ書ヲ出シテ曰ク、之ヲ讀マハ則チ王者ノ師トナラン、後  
十年ニシテ興リ、十三年ニシテ我ヲ濟北ノ穀城山下ニ見  
ン、黃石ハ即チ我ナリト鬼神ニアラスンハ焉ソ能ク此ノ  
如キ豫言ヲナスヲエンヤ、其後十三年ニ至リ、良高祖ニ從  
ヒ、濟北ヲ過クルニ果ソ黃石ヲ穀城山下ニ見ルト云フ、是  
レ實ニ怪ト稱セサルヘカラフ、尋常隱君子ノ能クスヘキ  
ニアラサルナリ、若シ其豫言又ハ穀城山下ノ黃石ノ如キ  
ハ、皆張良ノ術策ヲ以テ自ラ設クルモノトセンカ、或ハ又  
後人ノ附會スル所ニシテ取テ以テ信ヲ考フヘカラストセ  
ンカ、然ラハ何ソ故ラニ之ヲ隱君子ト斷スルヲ要センヤ、



之ヲ鬼神トスルモ之ヲ隱君子トスルモ、其ニ其何物タル  
ノ疑ナキ能ハス、且ツ均ク臆測ノ評ヲ免ルヘカラサルヲ  
以テ、余ハ別ニ一說ヲ設ケ、之ヲ諸例ニ比考シテ推論スル  
所アラントス、

余案スルニ黃石公ナルモノ鬼物ニモアラス隱君子ニモア  
ラス、張良ノ權謀術策ヲ以テ自ラ設クル所ナリ、今其例ヲ  
引證スルニ、在昔耶蘇ノ罪ヲ得テ死刑ニ處セラレ、ヤ、其  
屍ヲ取りテ地中ニ埋ム、三日ヲ經テ之ヲ檢スルニ、復其體  
ヲ見ス、人以テ天ニ上ルトナス、若シ此說ヲシテ信ナラシ  
ムレハ、怪モ亦甚シト謂ハサルヘカラス然ルニ人アリ余  
ニ語リテ曰ク、是ノ如キハ詐謀信ヲ取ルノ策ニシテ其實  
然ルニアラサルナリ、凡ソ人タル其師誅セラレハ、百方  
經畫シテ、其耻ヲ雪キ其名ヲ立テント希望スルハ、人情ノ  
常ニシテ敢テ怪ムニ足ラス、耶蘇ノ門弟亦此ニ意アリ、乃  
チ一策ヲ設ケ、夜竊ニ潘卒ノ間ヲ窺ヒ、屍體ヲ地中ニ取り  
テ、之ヲ他所ニ葬ル、出テ、流言シテ曰ク我師主墓ヲ脫シ  
テ天ニ上ルト、人來テ墓ヲ檢スレハ果シ其體ヲ見ス乃チ  
以テ神トナスナリト、此說固ヨリ推測ニ屬スト雖モ、又以

テ疑ヲ解クヘシ、顧テ支那史ヲ見レハ、種々之レニ類スル  
モノアリ、殷ノ武丁夜聖人ヲ夢ム、其見ル所ヲ以テ群臣ヲ  
視ルニ皆非ナリ、乃チ此ヲ野ニ求メ、傳説ヲ得立テ相トナ  
スト云フカ如キ又怪ムヘシ揚慎之レカ辨チナシテ曰ク、  
武丁嘗テ民間ニアリテ、己ニ說ノ賢ヲ知レリ、一旦擧テ之  
ヲ臣民ノ上ニ置カント欲スト雖モ、人ノ信ヲ得サランコ  
ト恐レ、故ラニ之ヲ夢ニ徵シ以テ民ノ心ヲ導クナリト是  
說又一理ナキニアラス、其後後漢ノ明帝夢ニ金人ノ殿庭  
ヲ飛行スルヲ見テ、乃チ佛經ヲ天竺ニ求ムト云フカ如キ、  
近クハ我朝後醍醐帝坐置ノ御夢ノ如キ、皆人ノ心ヲ導キ  
信ヲ得ン爲メニ設クルモノナリ、  
張良ノ事甚之レニ類ス、初メ良ノ始皇ヲ博浪沙中ニ狙撃  
スルカ如キハ、蘇氏ノ言フ如ク、少年剛銳ノ餘匹夫ノ力ヲ  
用フルモノニ過キスト雖モ、其亡テ下邳ニ匿ル、ヤ、假令  
ヒ良チシテ凡庸ノ人タラシムルモ、其心竊ニ事ノ成ラサ  
ルヲ悔ヒ、大ニ自ラ悟ル所ナクンハアラス、況ンヤ豪邁人  
ニ過クルノ才識アルオヤ、其能ク忍フト恐ハサルトハ何  
ソ一老人ノ戒訓ヲ待タン、高祖チシテ能ク小忿ヲ忍ンテ、



大謀ヲ就サシメタルモ良自ラ悔悟スルノ結果ナリ、且ツ  
 余思ヘテク、初メ良ノ始皇ヲ撃ツヤ、其才餘リアリテ學足  
 ラス、故ニ一旦敗テ取ルト雖モ、其退テ下邳ニアルヤ、他日  
 再ヒ事ヲ舉ケントスルノ大望ヲ抱クヲ以テ、十餘年ノ久  
 キ、豈徒然トシテ日ヲ消スルノ理アラザヤ、其間竊ニ書ヲ  
 讀ミ、兵ヲ講シ以テ時機ノ至ルヲ待チシハ、推テ察スヘシ、  
 且ツ其一敗シテ笑テ世間ニ傳フルヤ、良ノ心必ス一策ヲ  
 設ケテ、前耻ヲ雪キ、信チ人ニ取ラント考ヘシハ、亦勢ノ自  
 ラ至ル所ナリ、良乃チ當時太公ノ兵書既ニ亡ヒテ久ク世  
 ニ傳ハラサルヲ以テ、人ノ之ヲ求ムルノ切ナルヲ見、自ラ  
 一編ノ兵書ヲ作り、號シテ太公ノ兵書ト稱シ、以テ世ノ求  
 ニ應セントス、然シテ猶ホ偶然之ヲ傳フルモ、人ノ信用ヲ  
 得ル能ハサランコトヲ恐レ、故ラニ老人ノ一話ヲ設ケ、直チ  
 ニ其手ヨリ受クルモノトシ、以テ世人ニ示スナラン、人或  
 ハ之ヲ聞キ、良ノ人ノ心ヲ導キ、信チ取ルノ術策巧ニ過キ  
 タリト疑フモノアルヘシト雖モ、平凡良ニ如カサルモノ  
 モ、其地位ニ臨ミ其事情ニ接スレハ、自然ノ勢此ニ至ラサ  
 ルチエス、況ンヤ張良ノ如キ奇才ニ長シ、巧術ニ達スルモ

ノオヤ、一タヒ良ノ一生ノ事業ヲ見レハ、其籌略常ニ人意  
 ノ外ニ出ツルヲ知ルヘシ、今其奇策中ノ一例ヲ舉ケテ之  
 ヲ證スルニ、高祖晩年太子ヲ易ヘントス、呂后怒レテ之ヲ  
 張良ニ計ル、良乃チ高祖ノ致スヲ能ハサルモノ四人アル  
 ヲ知り、之ヲ迎ヘテ太子ニ侍セシム、高祖竟ニ太子ヲ廢セ  
 ス、王守仁ノ論ニ據ルニ、己ニ決心シテ世ニ隱ル、モノ直  
 チニ太子ノ聘ニ應シテ來ルベキナシ、其來リテ太子ニ侍  
 スルモノ良ノ自ラ計ル所ニシテ、他人ノ容貌相類スルモ  
 ノヲ取テ高祖ヲ誣ユルナリト云フ、果シテ此說ノ如クナレ  
 ハ、良ノ奇策詐術ニ長スル高祖ト雖モ、其實ヲ知ル能ハス、  
 然ラハ老人書ヲ授クルノ一話ノ如キ、良ノ術策トナスモ、  
 敢テ怪ムニ足ラサルナリ、然シテ今時世ニ傳フル所黄石  
 公ノ書ノ如キ、何人ノ偽作ニ出テタルモ知ルヘカラス、取  
 テ以テ證トナスニ足ラス、其他良ノ晩年穀ヲ避ケ道ヲ學  
 フカ如キモ、生來多病ナルヲ以テ爲スノミ、決シテ黄石公  
 ノ訓ヲ受ケタルノ故ニアラサルナリ、  
 以上論スルカ如ク、古代民知未タ開ケス、人情朴直ノ時ニ  
 當リテハ、才力稍々人ニ長スルアレハ、百方計略ヲ運ラシ、愚



民ヲ誑惑スルヤ明ナリ、既ニ偽計詐術ヲ用フル以上ハ、其事實ノ發覺スルモノト發覺セサルモノナクンハアルヘカラス、不幸ニシテ發覺スルモノハ、人傳ヘテ偽計トシ、幸ニ發覺セサルモノハ、實事トナスノミ、故ニ今日人ノ實事ト稱スルモノ必ズシモ偽術ニアラサルヲ保スヘカラス、見ヨ昔時希臘ニ「エムペドール」ト稱スル一儒アリ、自ラ神トナリテ人ノ信ヲ得ント欲シ、一日勿然迹ヲ潛ム、誰レモ其行ク處ヲ知ルモノナシ、故ニ皆天ニ上ルト稱ス、其後近傍ノ火山噴出スルニ會シ、「エムペドール」氏着クル所ノ舊靴ヲ擲出スルアリテ、忽チ氏ノ身ヲ噴火口ニ投シテ、神ニ化スルニアラサル所以ヲ知ラル、ト至ル、是レ計策ノ敗レテ發覺スルモノナリ、若シ其火山ノ噴出ナクンハ萬世氏ヲ以テ天ニ上ルト傳フルヤ明ナリ、陳涉吳廣ノ始メテ起ルヤ、兵卒ノ信用ヲ得ント欲シ、帛ニ丹書シテ曰ク、陳涉王タラント、竊ニ之ヲ魚腹ノ中ニ置ク、兵卒ノ之ヲ買テ烹ルモノアリ、其書ヲ腹中ニ得テ、大ニ之ヲ怪ム、又一策ヲ設ケ、夜狐鳴シテ曰ク、大楚興ラン、陳涉王タラント、卒皆驚ク、近ク我豐太閤ノ朝鮮ヲ征スルニ當リ、嚴島祠ニ謁シテ

百錢ヲ投シ、以テ祝スルカ如キ、又此類ナリ、是レ皆一時人ヲ欺キテ信ヲ取ルノ策ニシテ、其事ノ簡單知レ易キヲ以テ竟ニ事實ノ發覺スルニ至ルナリ、理ヲ以テ之ヲ推スニ計策ノ發覺スルモノアレハ、亦發覺セサルモノナクンハアルヘカラス、彼ノ耶蘇上天ノ事、武下夢ノ說、張良老人ニ遇フノ話等ハ、其術策ノ密ニ涉リ巧ニ出ツルヲ以テ、幸ニ發覺セスシテ、今日ニ至ルモノト知ルヘシ、故ニ若シ卓眼ヲ以テ之ヲ洞視スルキハ、皆權謀ノ術策ナルヲ、瞭然掩フヘカラサルナリ、余輩斯ク論シ來ルモ、敢テ確乎タル明證アリテ云フニアラス固ヨリ一己ノ臆說私見ニ過キスト雖トモ、古代ノ事タル者ニ後人ノ附會ニ屬スルモノ多キノミナラス、英雄才識ノ權謀術策ニ出ツルモノ少カラサルヲ以テ、史上ニ見ルモノ先ツ之ヲ今日ノ理ニ考證シテ、信ヲ置クベキモノハ存シ、疑ハシキモノハ其實ノ眞偽ヲ討究セサルヘカラス、良ノ老人ニ遇フカ如キ、之ヲ鬼物トナス固ヨリ怪マサルチエス、之ヲ隱君子トナスモ、猶ホ疑ナキ能ハス、若シ之レニ反シ盡ク張良ノ計策ニ出ツルモノトナスキハ、



疑團立ロニ氷解シ得ヘキナリ、且ツ之ヲ諸例ニ比較シテ  
其ノ信ヲ考フルニ、余カ説ク所却テ實事ニ近キヲ覺ユ、故  
ニ爰ニ之ヲ論シ、併テ古史ノ事實ヲ知ルノ難キヲ辨スト  
云フ

學 會 記 事

○工學協會紀事 明治十六年一月廿三日午後五時三十分  
より月次例會を神田今川小路玉川堂ニ於て開く。岡胤信  
氏近年本邦の諸大河ニ用ふる和蘭風の粗朶工の構造及以  
築造入費概算を辨明し併せて粗朶工の本邦諸大河の改修  
ニ缺く可あらざる所以を述ぶ。中島銳治氏建築の基礎、  
堤防等の土工ニ於て杭を槌撃するニ費を力を計算する公  
式を述へ併て從來用ひし公式の不完全なる次第を示す。  
全二月廿七日午後より月次例會を開く會場前ニ同し。原  
龍太氏東京府下玉川上水水量實測の概略を述べ水流速度  
の測定河溝斷切面の算法を論し測量圖ニ依て之を説明と  
次ニ關谷清景氏地震及以家屋建築の關係を論ず初め年々  
東京府下ニ發る地震の數を算し次ニ地震の爲め家屋の

倒る模様を擧げ日本家屋建築の改良法ニ及ぶ。  
三月十日會員白石直治氏文部省の命ニ依り米國ニ留學と  
るニ付上野三河屋ニ於て送別の筵を開く席上演説あり  
三月廿七日午後六時より月次例會を開く會場前ニ同し。  
古市公威氏復式瀛機コンバチングエンジンの功用率を算定するニ當りクリヤランス並  
ニ瀛筒スライドバルブより瀛筒に達する通路を充つる蒸氣の多少より  
り功用率ニ莫大の増減あるを説明を而して佛國工師某の  
試験せし結果を擧げ試験表ニ依て詳論を。近藤仙太郎氏  
量体法の公式を論し米國カナ州某數學者の考案せし一  
の公式を用ふれば無慮二百個の實体の容積を算するを得  
へきを述ぶ。  
四月廿九日月次例會を開く會場前ニ同し。田邊三男君水  
雷火船の説を述ぶ始めスプール槍形及以魚形水雷火船の構造並ニ  
其使用法を説明し併て兩者の得失を比較し且つ横須賀造  
船場ニ備ふる水雷火船ニ就て交々解釋する所あり。二見  
鏡三郎君米國合衆國政府の發議よりくる萬國本位子午線  
及以通世時の設置ニ關し演説あり先般同政府より萬國協  
議會を華盛頓府ニ可開ニ付議員派遣の事を各國ニ要求さ



をたれの我政府よりも議員を渡航せしむるの内決ありたる由を告げ該通世時の吾國に關し便否如何を述べ。大屋權平君江戸川水理測量の概略を述べ地圖に依て實測の順序と詳論し特に水準器に使用三角布設、深淺測方、水速算定の法を示す。

○東京生物學會記事 明治十六年四月廿一日(第二土曜) 午後第二時より東京大學三學部内於て例會を開く通常會員十四名出席幹事前會の記事を朗讀し畢つて佐々木忠次郎君の兩棲動物の尿道生殖器系 (Uro-geital system of Amphibians) 箕作佳吉君のルーボック氏著の蟻の説を摘拔演說せられ第四時閉會とす。

○東京化學會記事 明治十六年三月十七日午後二時例場は集會と、櫻井錠二君以後記事中は毎會出席員の姓名を記入せんことを發議せしむ賛成者なく唯其員數のを記載して可あらんとの説多きを以て之を決し、次は書記起て准員規則案を朗讀す、

東京化學會准員規則案

既決の分

一本會は准員を置くへし未決の分

一會員として正員と同額の會費を納めざるものを准員

とす

但し准員の會費として一ヶ月金十錢を納むべし

一准員として正員たらんと欲するもの其旨を書記に

報知せし

但し已に正員たるもの准員とあるを得ず

一准員の會誌を送る

一准員の議事は與るを得ず

但し會場演說並に學術討論の此限を非ざる

委員

松井貞吉

櫻井錠二

高松豊吉

久原躬弦

中澤岩太

右准員規則案本日出席會員衆議の上皆原案を決し、書記曰く本會雜誌印行遅延及ひたるものを速に編輯出版せんか爲先會長の櫻井、久原、杉浦、磯野、石藤、松本、中澤、



中川、高松の九氏を委員とあり各々外國化學雜誌を掲載せる論文中より適宜な二ヶ條を抄譯し來る廿五日迄其草稿を書記に郵送せられんことを依頼したり、例に依り來る四月七日本會第五年會を開くことと決す因て會長、書記一名(高松君)會計一名(石藤君)と別々櫻井、中澤の二君を委員とし右に關する一切の事務を擔任することと決す又同會の演說者の會員櫻井錠二君杉浦重剛君及ひ來賓三宅秀君に依頼することと決す、次は久原躬弦君メダザイリン芳香属体の炭水化合物の酸化を就き演說す、次は中澤岩太君玻璃熔製の説を述べ

四月七日第五年會當日左の諸君を招待し、加藤弘之君、服部一三君、濱尾新君、宇都宮三郎君、三宅秀君、杉田玄端君、岩佐巖君、辻新次君、タイバルス君、マルセルト君、ワグネル君、アイクマン君、杉浦重剛君事故ありて右年會の演說を辭したるを以て高松豊吉君之に代る、四月七日午後三時より東京大學三學部に於て本會第五年會を開く會長松井直吉君起て前年の年報を述べ次は來賓三宅秀君醫學と化學との關係を演說す、次は會員高松豊吉君

製造化學研究法の大意を演述し、次は會員櫻井錠二君熱化學に付き演述を但し本日ハ外國人の來客も有るを以て特は英語に演せられたり、右終て一同別室に於て晚餐し午後八時半閉會は、當日來會の正員は二十一名、招待の來賓中不參ハ加藤弘之君杉田玄端君及ひワグネル君なりき

○數學會 本月五日東京大學三學部内に於て數學會定會を開き學務委員六名と事務委員二名とを選舉せり其姓名左の如し

學務委員

菊池大麓 岡本則録 山本信實

大村一秀 長澤龜之助

外一名ハ姓名を聞漏せり

事務委員

河北朝隣 長澤龜之助

又來月の同會の年會を開くよ

雜報

○菊池大麓君 今般華盛頓府に於て萬國一定の子午線を



用ゐることゝ共同の時刻と定むることには付き萬國會議を開くよしよて東京大學教授菊池大麓氏の右の委員として出張せべき旨太政官より命せられたり同氏發途の日未定あるとも近々の内あるべし但會議の趣意の詳細の後號よ記載びべし

○三原親補君 栃木縣士族三原親補氏の多年米國に在住しホストン府の某製造所を偏り器械の製造法を修業されしが技術大に進歩し去月十九日一と先歸朝されし由

頃日獨乙國に留學せらるる古藤文次郎氏の許より社友某氏に贈られたる書簡を得たるが一に瑞甸地學雜誌に抄譯を係り一に獨乙國大學の景況を係り其は學術上の利益ある蓋し慤りたるべしと思考するが故に今茲に其概要を摘録す

嘗て著名なるノルデンスキナルド氏が北洋遠征の歸途我邦に來りて長崎近隣ある茂木村に於て含植殭石層を發見せられたり蓋し該層と近古層上部ブリチニオンに屬し厚さ凡る百尺餘、岩石と火山拓發なりと云ふ其層中に埋藏されし植殭石と古植物學に著名なる同國教授ナートホル

スト氏之を査定せり依て今其屬名を左に列舉せん

- Fagus, Quercus, Castanea, Juglans, Pterocarya, Carpinus,
- Populus, Salix, Myrica, Alnus, Betula, Zelkova, Celtis,
- Lindera, Litaea, Styrax, Clethra, Deutzia, Philadelphus,
- Prunus, Rhus, Acer, Tilia, Clematis, Liquidambar. 等
- 今尙る確知し難きもの *Magnolia, Xanthoxylon,*
- Ailanthus, Ilex, Casia, Cornus, Diospyros, Polygonum*
- Chloranthus.* 等なり

ナートホルスト氏曰く以上指名せし植物は依り考按を下に時の近古層ブリチニオン時代の九州地方の今日の九州地方と氣候は大なる差異ありて當時と蓋し今日より遐に冷氣あると覺ゆるあり其憑據をへき事實の其殭石中暖帶地方に暢茂せる物殊は僅々あれり然るに現時該地方は蕃殖せる草木の之は反して暖帶植模に屬するもの決して少くとせず

瑞士國の我長崎の經度より北方に偏在する十五度ありと雖ども近古層ブリチニオン暖帶植模の其遺跡顯然として地層中に存在せり彼我相比較せし當時の本草と現時日本南



方のものと容体甚ぶ相類似す而して日本南方の恰も過去せし數億萬年前の瑞士國ニチシオン時期を目前に見るが如き觀を爲せり氣候の移遷以て思ふへま

因ふ云ふ近古層ニチシオン時代の到る處暖帶の氣候を有しプリチシオン及ひて漸々寒冽襲來し現時層の初期に至り寒氣凜烈つ極に達し滿地氷層の覆ふ所とされり地學者此時期を稱して氷期と云ふ今時は近づくに従ひ温和の氣候又た回復せる事(北冰南冰二洋を除くの外)今日吾人の目前に見るが如し

亞細亞東方に於ては未だ曾て今日に至るまで氷層期の發見されざるものありとノルテンスキナルド氏北洋周遊の際と雖ども西比利亞北沿海地に舊氷期層の痕跡を發見せし事更無かりと云ふ魯人シユレンク氏長く黑龍江地方に地學研究の巡回を爲せしのごも該層を認得る事能はざりヒトホウヘン氏支那に旅行して氏も亦無氷期の説を爲せり之を反して我邦にては一昨年工部大學のミルン氏日本に氷期存在せしとの説を唱へられども憑據確實をらざれり依て以て實事と爲すに足らず然を共若し地學時

代の全地球に於て前記きたる如く果して氣候の變遷ありば余の日本中にも必し氷期層の痕跡ありと妄斷をべからんや日本南方往時寒烈なりし証あるに於てをや故に我邦地學者の殊に注意ある事欲するに此點に在る以下次號

○此程理學士石川千代松君の譯述されたる動物進化論の本社にも一部送られしか進化主義の新説を周到精確に論せられたるものなり進化主義の蘊奥を知るに此書の右に出づるものなきべし

○本年ハ二月ヨリシテ雨日雪天頗多ク晴朗ノ日稀ニシテ寒氣モ亦隨テ消シ兼テ氣候甚常年ニ異ナルヲ覺ヘタレバ東京大學氣象臺員ニ請フテ得タル明治十三年ヨリ本年マデノ一月ヨリ五月十五日ニ至ル晴雨ニ關スル諸件ノ報告ヲ一表トナシ之ヲ左ニ掲ケテ以テ看客ニ示ス

○表中雨天ト雨アリシ日トハ降雨時間ノ長短ト雨量ノ多小トニ由リテ自ラ區別アリ是ヲ此ニ詳ニセズ  
○雪ノ量トハ其融解シテ液態ヲ爲セルニ方リテ測度セルモノナリ



月 五 デマ日五十	月 四	月 三	月 二	月 一	月
同同同明治 十六十五年十三年	同同同明治 十六十五年十三年	同同同明治 十六十五年十三年	同同同明治 十六十五年十三年	同同同明治 十六十五年十三年	年
一 五七五〇	一一一一 六一七三	一一一一 九七七九	一一一一 二九六九	一一一一 二二八一	晴天ノ日數
三六八三	一一一 〇四九〇	一一一 六〇七五	一一一 八三九三	一一一 〇一一〇	曇天ノ日數
七二二二	四五四七	雪雨雪雨 六四三四一六	雪雨雪雨 五三一五三七	雪雨 雪雨 一八二一一〇	雨天ノ日數
一一一 二八一六	一一一一 六五七九	一一一一 七二六七	一一一一 四五六七	一一一 〇二六五	雨アリシ日
八七二九 八一六四 一一五四 〇九九一 二六四二	一一一一 三〇一四 二五七一 八一九五 九八〇五 三一七四	雪雨 雨雨雨雨 雪 雪 一一一 七三八七三四 些三二二二五六 九二四九三五 九八九三五五 〇三九三七八	雨雨雨雨雨雨雨雨 雪 雪 雪 雪 一一一 六八 七一四 四 八六六三六六六九 八一五四六八二九 〇〇五五一八二八 九六三七一八三七	雨雨 雨雨雪雨 雪 雪 一一一 二四六 一 八六三 四八二九 三五六 四六五五 五九八 六三四八 七四八 五三〇三	雨量 ミリメートルヲ以テ單 位トナシ、點ヲ置ク



定價金九拾八錢

東京神田區裏神保町壹番地

東洋學藝社

發行所

持主

有田定次郎

編輯人

小柳津要人

印刷人

廣瀨安七

東京神田裏神保町

澤屋蘇吉

大賣捌 同神田淡路町

巖々堂

同日本橋通三丁目

丸善